

- 重 高 播磨大掾藤原、越前住又武州住。寛永以下同銘九代に至る
- 貞 國 肥後大掾、越前住虎徹師。慶長
- 宗 道 上總大掾二代、寶曆頃以下同銘四代

▲越後國には水心子門人、一水清常徳(天保)朝尊門人、道長嘉永正道、吉道などあり何れも新々刀の作人

### 加賀國

加賀國には澤山の鍛工がある、中に最も勝れたのが、賀州住藤原兼若であらう。兼若は山田淺右衛門の以て大業物の部に擧げた作人である。其作は地鐵細やかにして能く締り沸しづみて匂深く、多く

## 賀州金澤住藤原兼若

は小亂れ刃である。兼若は尾張犬山の兼若子である。同銘數代、二代は高平出羽守藤原高平と切る、これは廣直刃に砂流しがある。

## 加列住陀羅尼橋勝國

山城大掾藤原源一清定は、彫物の上手、賀州大聖寺の住、地鐵荒く水田の如き沸がある。炭正重、長次、兼植などはまづ通常初代國勝は、兼若及、元祿の加州兼則と共に大業物の作者、勝國は藤島の末で、初め家重と號す。業物の作者である。

- 若 兼 澁州關住兼若孫、加州住、金澤住、慶長寛永
- 兼 若 二世初高平、加州住、加州金澤住、辻村出羽守、越中守、寛永寛文
- 兼 若 三代加州住、明暦寛文
- 兼 若 四代加州住、延寶
- 兼 若 五代加州住、元祿享保

- 兼 若 六代加州住、、甚大夫、享保元文
- 勝 國 加州金澤住橋、、陀羅尼藤島將監、、度長
- 勝 國 二付加州金澤住人陀羅尼善三耶、、伊豫大掾橋、、
- 勝 國 三代加州金澤住伊豫大掾、陀羅尼橋、、寛文貞享
- 勝 國 四代加州住橋、、享保元文
- 勝 國 五代加州住松戸善三耶橋、、寶曆明和
- 藤島友重 本國越前藤島、加州來住、以下同銘七代
- 清 光 加州石川郡泉村、天正以前、後十數代同銘に打つ
- 家 次 加州能美郡能美村、文明、延享、以下五代同銘、
- 信 友 平安城信國の末、天正中來住、以下數代同銘、
- 兼 延 藤左衛門、天文項、以下數代
- 秀 勝 加州炭宮祖、
- 兼 春 澁州秀勝子、兼春に相傳、竹右衛門といふ、以下數代、

▲外に信長、忠吉、重次、伊賀守光治、荒木八郎則家、丹後守重常、土佐守正景など數十工あり

▲能登國には勝光(寛文)、國次、律師(文明)などの二三輩あり

▲越中國には宇多國光の一類多く、元祖國光十八代に宇多國長あり、同

銘二代、勝國、國長、清光(二代)その子孫、外に高廣、則村(天正頃)などがある

▲越後國には珍らしくは上工の部に屬する兼光がある、これは地鐵強き、細直刃である。

▲佐渡國には元祿頃の人に康氏といふ者がゐる

## 山陰道八ヶ國

### 丹波國

丹波篠山に武藏守源利重がある、その外は新々刀の作者で重次は良き鍛、太刀象幅廣く、地鐵細かに潤ひあり、直及多く、皆燒、大亂、小亂も燒く、

●繁

榮

繁廣門人、篠山住人、吉田藤次郎といふ、陸奥大掾。文化

重

次

門人、福知山住人、嘉永、村岡新助といふ

廣

次

門人、國領住人、黒岡源吉、天保

甚他に近岑(嘉永)繁信(文紀)などがある

▲丹・後・國には細川正義門人の正俊、明玲、久太夫、化正行(弘化)、道長門人の正道(嘉永)などがある

▲但馬・國には但馬法城寺橋正則を外にしては、新々刀の守友(弘化)、國(文化)助左衛門(弘化)信行(安政)正直(安政)などの數工がある

因幡國

因幡國には良工がある、日置兵助、五代の兼先、藤掛善右衛門、六代目兼先(兵助の妹婿)は、兼光同銘の中でも、勝れて良き刀工である。兼光の祖は日置伊助といひ、關の兼光の門人である。二代は通稱を惣右衛門、此

の二人は共に菱垣鏡である。三代目は日置惣十郎、四代目は因幡に生れて日置兵右衛門、五代は元祿頃の人で、地鐵強き、小亂刃を打つ。

忠國は信濃大掾、四代ありと云ふが、下二代の方が上工である、沸匂ひの強き鍛へ。

外に壽格兼次、壽格はよき刀を打つ、文化頃、二代は壽實、三代は壽幸、四代は壽秀(嘉永)、二代と三代からは澤山の刀工が出てゐる、之等は新々刀の作人である。壽幸は上手。嘉永の安陪則平にも良い鍛がある。

▲伯耆國は廣賀、正綱などを外にしては、眞守(天保)廣吉(天保)吉幸(嘉永)などがある

出雲國

出雲國には大明京といふ珍らしい刀工がある、これは高麗の歸化人といふことで、同銘數代あるが、初代の作は良刀である。松江に住す、享

保年の大明京は通稱を治兵衛と云つた。

外に清則、冬廣、永信(弘化)などがゐる

▲石見國には寶榮(寛永)がある、此の人の作は水田の作の如く荒沸がある、鎚高く、地鐵細かに上手である、外に盛次、新々刀では清重(文化)の類が數工。

## 山陽道八ヶ國

### 播磨國

播磨にはかなり良工がゐる、鈴木五郎右衛門、また右作、また右五郎は、宗榮といふ、其作地鐵乾きて、大のたれ及、大亂れ及、荒沸、小沸多く、匂頗る深く、彫物があり、勝れたものがある。

金重は姫路の治工、宗貞、吉國、重貞、氏重、信利、氏繁、義國などはまづ聞えたる作人である。

新々刀では秋秀(文政)、正國(天保)、則文(天保)などである。

### 美作國

當國では、まづ米澤臣加藤長運、齋綱俊を以て第一とすべきであらうか、その外には因幡の兼光、津山に來りて打つ、兼景、正守、正徳は良き鍛。美事なる刀である。

新々刀は正秀、門人信高(天保)、貴勝(文化)など弘化年中の正利も勝れた作人である、此の一門、人多し。多田四郎左衛門、正利また美事である。

### 備前國

永正、與三、左衛門、祐定、永正、彦兵衛、祐定、此の二人は山田淺右衛門が擧げた大業物の作者である。平兵衛、祐定も與三、左衛門以來の上手であ

つて、宗光、勝光等に劣らざる良刀である。然し祐定同銘六十餘人平凡の刀も多いから、名に誤まられないやうにするが好い。次は横山源八良壽次、これは良刀の中。

東多門兵衛正成は、其作地鐵細やかにして匂深く、潤ひありて備前風の亂れ、中々良し。正盛の作また同じ、備前作一斑に衰へ、良工ありと雖も古への如き業物は少ない。

横山加賀介藤原祐永は長船中興の祖と稱せらる。新々刀の上手である。地鐵細かに、丁子亂の上白く、地及玉のやうにして底青き風情がある。

君萬歳横山祐包もまづ上手、重心の風情あり、丁子亂を焼く。

- 祐定 四世祐光嫡子横山與三左衛門、備前國長船住與三左衛門尉、永正、或永祿、天正
- 祐定 二代備前國住長船源兵衛尉、大永、或天文、天正
- 祐定 二代弟、横山重兵衛尉

- 祐定 三代長船七郎右衛門、弘治
- 祐定 源兵衛尉二子、長船權左衛門作州住、農具鍛冶となる。天文、同三子、大西彦兵衛尉、阿波徳島池田城主中村右近の臣となる。天正
- 祐定 四代養子二世祐定四子、長船藤四郎、天正
- 祐定 七郎右衛門二子、横山與三兵衛尉、後大阪住
- 祐定 五代備前國、長船住七兵衛尉、寛永萬治、寛文延寶
- 祐定 藤四郎二子、横山五郎
- 祐定 六代横山平兵衛、備前國長船住横山上野大掾藤原、寛文
- 祐定 七代養子五世七兵衛尉、祐定五子、初祐信七之進、後七兵衛、大和、大掾藤原、正徳、元祿
- 祐定 八代養子横山忠之進、備前國長船住、享保、延享、河内守源祐定二子
- 壽吉 八代次子、備前長船住、横山宅之進、寛延、明和
- 祐定 九代横山七兵衛、後改壽光、寶延、寶曆、明和
- 壽守 十代養子七兵衛、備前國長船住人横山、安永、八世祐定二子、初稱定治

横山太平

五代子、無作

祐 定

五代子、横山孫大夫。號常念。元祿

祐 忠

五代子、七太夫。後岡山住改喜入

祐 定

藤四郎三子備前國長船住、源左衛門尉、。寛永寛文

祐 定

二代五子横山源之進、備前長船住、。貞享享保

祐 定

右三代横山源八郎、備前國長船住、。享保

祐 定

右四代横山安次郎、後源八郎、備州長船住、。後改壽次。

祐 定

寛曆明和安永

祐 定

藤四郎四子備前國長船住、横山宗左衛門尉、。寛文

祐 定

右二代仁左衛門備前長船住河内守源、。又攝州作

祐 定

州住。元祿

祐 定

右三代備前國長船住横山七郎右衛門尉、。享保

祐 定

右四代源五郎、備前國長船住、。寶曆

祐 定

五代備前長船住、。後薩摩元平弟子と爲り祐平と

祐 定

同、備前國住長船五郎、。接永

祐 定

永正祐定九世末葉備州長船住、。備前國長船住與三

祐 定

左衛門尉、。於難波作之接文、後大阪住。横山氏

祐 定

備前國住長船九郎右衛門尉、。作。延寶

祐 定

備前國住長船源兵衛尉、。又相州小田原住。慶安

祐 定

二代備前國住横山、。藤三郎。元祿

祐 定

備州長船次郎三郎源、。慶安

祐 定

備前國住長船、。以、夫粟鐵作之。接文

祐 定

備前國住長船三右衛門尉、。作。享保

祐 定

備前國住長船七左衛門尉藤原、。享保

祐 定

長船住横山與兵衛、。寛文

正 成

東多門兵衛藤原、。備前國岡山。寛永

正 次

正成子、東多門兵衛尉藤原、。備前國岡山。萬治



その外國重同銘七名を擧ぐ、それは下の系譜と大同小異である。さて備中水田の家譜を見ると、大月佐兵衛、松山城下水田村に住す、その子三郎兵衛、その子與五郎、次男市藏、三男安左衛門とある、三代目は名高い大與五國重である。一帯大與五の作は荒沸、小沸多く、匂甚だ深く、地鐵に潤ひあり、締りてうるはし、銚子は多く、火焰丸く締つたのがよろしい。理兵衛爲家は、左兵衛國重の子であつて、皆部水田と唱ふる人である。武藏兼常は美濃關の住人、奈良太郎の後である、松山藩の刀工。

- 國 重 備中國水田住左兵衛、備中國松山住左兵衛尉、永祿天正
- 國 重 二代備中水田住、三郎兵衛、慶長
- 爲 家 二代の弟河野利兵衛
- 國 重 三代備中水田住大與五、大月與五郎、寛永
- 國 重 大與五の弟、山城大掾源、大月傳七郎、武州住、寛永
- 國 重 四代備中水田住大月勝兵衛、寛文

- 國 重 備中國住大月新十郎、後阿州住、萬治
- 國 重 二代備中國住人與五右衛門、水田住、又備後阿波住、延寶
- 國 重 三代備後福山住水田、備州三好住、傳左衛門、元祿
- 國 重 大月又七備中國水田住、元祿
- 國 重 二代大月八郎左、備中國水田、正徳享保
- 爲 家 大永爲家末二世國重弟、備中國皆部住河野利兵衛尉、皆部水田と稱す
- 爲 家 二代備中國皆部住、與太郎、寶文
- 爲 家 三代備中國皆部住河野與四郎、延寶、或二世爲家弟

▲新々刀には壽實、祐利などがある  
 ▲備後國にも國重のものがある、此國には瓶三原、尾道三原の鍛工がある、た所だけに五阿彌といふ直刃の名人がある。新々刀では竹中邦亮(弘化)高平(備前同人、天保)正秀(天保)正智(弘化)など數工ある



### 安藝國

安藝國は肥後守輝廣の一門と分家廣隆の一類に依て代表せられてゐる。中にも廣隆は刀の性良く、出羽大掾國路または國備にも似た業物があるといふ槍を打つ。越前大掾森本富之進廣隆は、廣隆の一類だが系譜は判然しない。其作は大亂れ及にして匂ひの深いものである。國佐、則房は通常の作人、外に冬廣(本國若州)の一類がある。

- 輝 廣 初名兼友又一件、肥後守藤原、肥後守、本國美濃、關兼常未、安藝住、慶長寛永、一脱尾張兼常、天正中福島氏に隨ひ藝州に住み輝廣の後を繼ぐと云
- 輝 廣 二代初兼久、播磨守藤原、慶長或寛文
- 輝 廣 三代藝州住藤原、寛文
- 輝 廣 四代藝州住、延寶
- 輝 廣 五代藝州住、貞享
- 輝 廣 六代藝州住、元祿初廣國五世、弟子、師の後を承

- 輝 廣 七代初廣隆、藝州住、
- 輝 廣 八代藝州住、正徳
- 輝 廣 九代初廣光、藝州住、享保
- 輝 廣 十代藝州住、元文
- 輝 廣 十一代藝州住、播磨守藤原、寶曆
- 廣 隆 藤原、寛文
- 廣 隆 二代藤原、寶永中師の家を襲ぎ輝廣と改
- 廣 隆 三代藝州住藤原、陸奥大掾、天明享和

### 周防國

周防には其類多からざれ共、高橋基之進源行重といふ名工がある、行幸は嘉永頃の作者、銘は隸書に切る、播磨、丹波、攝津等に住んでゐた、其の作幅廣くして切先伸び、鍛ひ板目、柃目肌もあり、沸匂ひ深くして美事な

ものもあるといふ。

藝州の冬廣、また當國で打つ、外に盛俊、來道國、月山正宜などがゐる。

### 長門國

長門國には二王一類の鍛冶がゐるが、其の作は、段々衰微してゐる、  
が、玉井刑部左衛門二王方清は中亂れの強き刃で、良き鍛である、寛文の  
頃から同銘數代ある。二王の末流に當る、藤原廣太郎は寛永頃の治工  
だが、中々捨て難いものがある。清重一類また多し。

新々刀では直國(嘉永)正重(文化)、二王(弘化)正實(弘化)など少なくない。  
中にも正俊は勝れてゐる。地鐵の鍛ひこまかに、沸、匂ひ深し、本姓森源  
太郎、朝尊の門人である。

### 南海道五ヶ國

#### 紀伊國

紀伊國には第一に最上大業物の南紀重國がゐる、重國は誰でも知つ  
てゐる通り、於南紀重國作之と銘を打つのである。八代將軍に召され  
た一人であると云ひ傳へられてゐる。同銘五代あるが、初代を上手と  
する。その作地鐵至つて濃やかで、潤ひあり、沸、匂ひ深く、多くは亂れ刃、



直刃は海内第一の名工と云はれてゐる、また上作は來國俊に似てゐる

と神田白龍子も譽めてゐる。銚子は三原物のごとく締り忠の鎬能く立ち、ヤスリは切り鈍やすりにして、勝手へ稍筋違になる、棟に小肉あり、反り格好極めて宜しい。二代目金助は稍之れに劣る。

相模守則廣のりひろも亦上手、勝れたる作人である、通稱は傳右衛門、丹羽相模守源則廣と切つたのもある、その作は地鐵濃やかにして小沸、荒沸がある、匂も深い。

備中守橋康廣は、所謂紀州石堂であつて、その作は地鐵細かに匂深きもの、同銘數代がある。二代は中頃に土佐將監、のち陸奥守と銘し、十六辨の菊花を切る。

紀伊國康綱は二代ある、初代康廣の門人といふ。康光、これも門人、友道、天狗、直茂、尙茂、廣信、祐國などはまづ中通りの作人であらう。

●重 國 手搦包永裔初包國、文珠九郎三郎、本圖大和又京師及府住、於南紀、造、紀州明光山住、慶長元和、豫永  
重 國 二代於南紀文珠、造之九郎次郎、寛文延系

重 國 三代於南紀文珠、紀陽文珠、作之、又美濃住、元祿寶永

重 國 四代紀州和歌山住九郎三郎、澁州岐阜住九郎三郎、享保

國 勝 五代初重勝、紀州住文珠四代子、天文

國 勝 六代二字、明和安永

重 次 紀州住文珠、造、寛文

▲淡路國には助政、祐平の二三輩。

▲阿波國には宗利(天明)、盛綱、重政、髪、永次、吉國などの通常なる鍛工あり、正秀門人の正守も父子相繼いだ。

▲讃岐國には水田の國重、高松に寓して打つ刀あり、吉政、包高などあれど通常の作人、極新らしい處に來ては、盈永(寛永)、藤里(文化)隆重(天保)などの數名がある。

### 伊豫國

伊豫國には少し立勝る作人も居る、相模守源國維は初め大阪に住し、のち今治に移る、良き方の刀工、陸奥守輝政も亦勝れたる鍛工、藤原國輝、これも鍛へ巧みなり。廣宣は中通りの作人、國良、初代國正數代あり、初代國房、長清、金長など、まづ聞えたる部類であらう。國輝の作は地鐵濃かにして沸、匂あり、勝れたるものが多い。

新々刀には國房一門、初代は豊州高田鎮門人、宇和島住石見守藤原と打つ人の同銘數代並に正道、國正、正秀などがある。

### 土佐國

土佐の新刀鍛冶には、堀内系、玉木系、森下系、木村系、刈谷系など、澤山の門葉がある。その内まづ勝れた鍛冶を擧ぐれば、第一に土陽住國道、これは水心子正秀に似た作人、木村氏の系統である。助包、包宗は普通であるが、土佐國住國益は勝れた鍛冶、其の作は地鐵濃かにして沸、匂ひが

深い。大阪の初代丹波守吉道の門人である。

上野大掾藤原久國、これは殊に良い鍛工である。國益の子、金四郎久道の門人である。

不動義旨は備中國青江の人、土佐の高知に住す、太刀象青江のごとくして格好よく、地鐵細かにして亂れ及多く、砂流しもあり、沸ありて匂深し、これは鍛の良きを以て現はれてゐる。

源正甫、銘を草書に切る、其の作地鐵の鍛へ濃やかにして、柃目の心ありて潤ひ、小沸多く匂ひ深く、頗る美事なものである。

義正は古澤八左衛門と號す、朝尊の門人となりて名人に至る、太刀象幅廣く、切先伸びて、鍛柃目の心がある。壽秀は始め刈谷忠國と打つ、水心子の門人、其の作地鐵細やかに、古備前の風ありて上手。勝廣は壽秀門人、其作地鐵細やかにして潤ひあり、大丁子、小丁子交りて匂ひ深し、地刃の位高く見ゆ。助秀は鍛細かに沸、匂深し、之れも上手。

▲堀内系譜

●貞 次 備中國青江郷貞次子孫、天正頃、貞次子、堀内次郎右衛門、慶長中土佐に來住、のち堀内宗敬といふ、  
 吉 次 宗敬子、犬字を打つ  
 盛 次 吉次子、彌右衛門、義旨、明曆、細の下に犬字を打つ  
 次 忠 (二男)、 吉 次 (三男) 次 重 (四男)

▲玉木氏系譜

●吉 光 京都粟田口吉光子、玉木安左衛門、

以下十數代、吉正(嘉永)に至る、此吉光、粟田口と誤ることあり、初心者は注意すべし

▲森下氏系譜

●久左衛門 非鍛治、日下村住人

吉 國 大和守吉道門人、森下孫兵衛、上野守、  
 吉 作 吉國子、三太夫

吉 行 吉國弟、大和守吉道門人、陸奥守、のち岡山平助と改む

▲木村氏系譜

●國 益 生國河内、大和守吉道門人、土佐に移住して木村平左衛門と號す、元祿、延寶

久 國 國益養子、近江守久道門人、上野大掾、平右衛門、延寶頃

護 國 初久國、上野大掾、延享

國 道 正秀門人、上野大掾、久太郎、享和

國 幸 上野大掾、代四郎、天保

國 利 上野大掾、網俊門人、平右衛門、嘉永

▲刈谷氏系譜

壽 秀 正秀門人、紫虹子、永尾宇太夫、始刈谷忠國と銘す。文化

刈谷 忠國 壽秀弟、弘化

秀 治 壽秀門人、瑞雲子、始國行。文化

一龍子 信秀 同、文化頃

勝 廣 同、關田眞平、嘉永

門人 正 矩 (弘化) 廣 信 (嘉永) 貞 信 (嘉永)

信 高 (嘉永)

●俊 宗 始壽秀門人、長運齋、弘化

門人 信 貞 (嘉永) 宗 吉 (嘉永) 近 宗 (嘉永)

秀 信 (嘉永)

其他行秀一類、助秀一類、義貫、朝國、行宗など數十名あり

### 西海道九ヶ國

#### 筑前國

祖九代傳信國の作は、地鐵至つて濃濃やかにして、匂ひ甚だ深し、信國吉種も至つて上手、地鐵濃やかにして、小沸、匂ひあり、勝れたる鍛ひ、源信國

吉政も立勝りたる鍛冶、鍛方同じき態まである。

筑前住源信國吉包、地鐵細やかにして、沸匂ひ深し、多くは亂及、勝れたる作人、筑前住源信國重宗、また勝れたるもの少からず。

筑之前州福岡住實次、稍勝れたる鍛工、福岡の是次、また名刀、守次、利次と並び稱せらる。

筑前住信國源正包むきか、享保中、江戸に出づ、良工、筑前住辰仲とみなか同列の良き鍛である。

信國光昌も勝れたる作、筑州源安吉も亦、高き位を有する。

●信 國 筑前福岡住源、新藤氏、寛文

信 國 二世筑前箱崎八幡境内住、正徳

信 國 祖十代目、於奥州禁同作之、生國筑前、信國一派、筑後久留米、移住、天和、中東武、直、奥州盛岡に轉住、新藤平兵衛、元祿、巳卯、歿

以下各人別也 信 國 、助左衛門作、寛文

吉 包 筑前國福岡住信綱源、寛文

吉 政 筑前國福岡住信國源、信國平四郎、新藤氏政之  
 吉 定 又吉貞、筑州信國源、福岡刀匠吉貞、掾文  
 友 國 筑之前州、造、寛文  
 利 次 筑前國福岡住、信國一派、貞之丞、掾文  
 吉 重 筑前國住信國源、天和  
 吉 助 筑前國住信國、天和  
 吉 次 筑前福岡住信國源、七郎三郎又東武、元祿  
 重 包 筑前住源信國、原田勘左衛門、後助六、葵一葉ヲ打、元  
 重 久 筑前國住信國源、平四郎、享保  
 正 包 筑州住信國、葵一葉ヲ打、又東武、享保  
 義 猶 冷泉津、筑前福岡光昌子、寛政享保  
 一 英 肥前國住、信國一派、天和  
 吉 寛 筑前國信國源、元祿

包 次 信國源、筑前前福岡刀匠重包子源兵衛、享保  
 吉 種 信國、作、筑前福岡住、元祿  
 重 貞 筑前國住信國源、元祿、或云大和守福岡住、  
 重 宗 筑前國信國源、元祿  
 光 昌 筑前國信國、信國末又左衛門、安永  
 光 重 筑前國、信國一派、年代不詳  
 ●源 盛 金剛兵衛の末、上座郡朝倉關屋九里住人、伊藤又右衛門  
 入道して、牛夕、寶曆  
 源 正 恒 盛重子、芳助、安永  
 源 正 弘 正恒子、彦左衛門、寛政  
 源 盛 重 正弘子、又左衛門、文政  
 弘 行 盛重子、實は弟、勘兵衛、天保  
 行 秀 盛重門人、豐永久兵衛、弘化

▲筑後國には柳川の治工鬼塚吉國、其工である、鍛地刃ともに美はしく、

沸にえは所々に燒堺をつく。次は三池の典太より出でし廣正すけまさ、資永すけなが、與よに三池住いけ、筑川の昌直、下坂忠親など聞えてゐる。外に新々刀は清廣きよひろ（享和）一類、吉次が矢鳥仙龍せんりゆう（天保）などがある。

▲豊前國には會津の長岡同人の長國、小倉の友行などがある、友行は鍛細やかにして勝れたる作。新々刀には中西直宗ちゆうしゅう（天保）、秀宗ひでむね（弘化）などがある。

### 豊後國

豊後には可成の鍛冶が饒多居る、佐伯住の正次、細直刃を打つ、甚だ美事なものがあつた。大和大椽貞行は、藤原高田に於て、最も勝れたる鍛冶とせられてゐる、同銘二代、其作は地鐵細やかにして小沸あり、直刃の名手である。

豊州高田住藤原國行、之れも勝れたる名工として聞えてゐる、此の人の作、地鐵細やかにして沸匂あり、裏銘に君萬歳と切るものもある。

同じく高田の宣行は、豊後藤原宣行、藤原宣行など、切る、通常の作であるけれども、良き鍛がある。藤原正行は、稍勝れた作、藤原國隆は、中河内の門人である、久留米家の鍛工、地鐵よく締りて沸匂あり、勝れたる作にして、甚だ美事である。

中通りの作人として聞えたのは、豊州高田住藤原統景むねかげ、豊後住藤原信行、豊後後住藤原則行、豊後三佐住藤原冬貫ふゆぬき、豊後住藤原輝行、豊後住藤原光秀、高田住藤原統久むねひさ、豊後藤原守行、大和守藤原忠行、豊後住吉行、小倉住友行など頗る多い。

新々刀には勝衡、國政、長秀など數工ある。

### 肥前國

肥前鍛冶は忠吉、忠廣の類が頗る多く、各人殆んど區別し難い程である。初代忠吉は肥前佐賀の人、京師に上りて平安城埋うめた、忠明、壽重しげしげ吉の



門人となり、忠吉と云ふ、通稱は新左衛門尉、のち武藏大掾となりて忠廣と改むと、此の人の作地鐵細やかにして小沸多く、匂深し、殊に中直及

# 肥前國住武藏大掾

## 藤原忠廣

の作は、粟田口と見まがふほどの良き業物がある。太刀

の豪氣高くして位あり、古刀とも見なば見らるゝことがある。銘の切りやうは一樣ならず、五字七字等いくらもある。最も此の人の作、沸と忠には明壽の風があり、その忠吉と切つたのは、忠先丸く、忠廣と切つたのは山形に造つたのが多いといふことである。

二代忠廣は平九郎といふ。寛永九年、父忠廣歿してより、忠廣と改むといふ。寛永十八年、近江大掾を拜す、元祿六年、歳八十を以て歿す、此の作は子の陸奥守よりも劣つてゐるが、地鐵細やかに中直、及細直、及名手

である。小沸多く、匂深く、銚子は締つて青江のやうに見えるものもある。

三代忠吉は平九郎の嫡子、新三郎と稱す、寛文二年、陸奥守に拜す、貞享三年歿す、年五十。此の人は父に先つて歿したから、忠廣と改めない。

然し作は祖父の忠吉と相伯仲し、地鐵の締り、及の強きこと、父にも勝れ、直及は大阪の津田助廣にも劣らぬほどであるといふ。亂れ及は一帶

# 肥前國忠吉

に肥前の治工には出来なかつたが、此の忠吉と初代

行廣の兩工は、良き亂れ及のものも少くないといふ事である。

それから肥前忠吉の及鍊法は、埋忠明壽より受た傳であるけれども、忠吉は自身に發明して必ずしも師傳を守らなかつた。彼が鍛法は四方攻である、それも普通の四方攻と異つて、眞鐵にする鐵は至て、やはらかで、地鐵は少し硬のである。硬き鐵にて包み上鐵を極て薄くしたる

のであるから、曲る事があつても折れず、殊に刀鐵いかにも良くして切味が至極好い。

眞了は井上眞改の門人である。その風は眞改そつくりで、至つて華

# 土肥有眞了

美忠の仕立、ヤスリまで眞改と同じ、鈍子も同様、同銘數名ある。肥前國伊賀

守源菊平は菊を切る、肥前國住大和、大掾藤原兼廣はその作美はしく、銚子締りて甚だ美事である。多くは廣直及、中直及を鍛ふ、勝れたる作人。市太守安は通常の作、佐渡掾藤原宗平は稍勝れてゐる。正廣は同銘數代。備中大掾藤原正永は上作、肥前二代正廣の初銘であるといふ。萬治三年より武藏大掾と銘す。正次は初代正廣の門人、通常の作。

國慶、盛次、平戸住正久、久次、四郎元忠など通常の作。肥前國佐賀住源吉房は立勝りたる作人。其作沸細かに、地鐵つまりて美はしく、至極の出來がある。忠清數代、まづ中通りの治守秀、守房などまづ普通、そ

の中伊豫掾源宗次は上手と稱せらる。太刀象は反り高く、沸細かに、勝れたものがある。作賀の吉永も亦宜し、初代忠吉に似たものもあると云ふ。

行廣、忠國など同銘數代、高田河内守本行は切銘が澤山ある。

## ●道

弘 橋本壹岐守、肥前國上佐賀長瀬住、元龜、天正

忠

埋忠、明、子、後、忠、廣、肥前國新左衛門尉、元和、寛永

忠

肥前國住近江大掾藤原、肥前國住新左衛門尉藤原、

忠

三代肥前國、陸、守、藤原、陸、大、寛、文、肥前國住陸、

忠

四代列忠、吉、肥前國、肥前國住近江大掾藤原、元

忠

五代初忠、廣、肥前國住藤原忠、廣、肥前國住近

忠

六代初忠、廣、新左衛門、肥前關忠、廣、肥前國、肥前國住

忠

七代平助、肥前國、天、明、享、和

忠

二代忠、吉、門、人、後、忠、廣、土、佐、守、元、和

忠 吉 右土佐守子、將監源、長崎住、寛永  
 廣 貞 二代忠吉類、相右衛門尉、後改吉家、元和  
 國 廣 廣貞子、六郎左衛門尉正保  
 兼 廣 國廣子、大和大掾大和守佐賀住、寛文  
 兼 廣 兼廣子、遠江守、享保  
 吉 住 兼廣子、初廣任越中守、享保  
 兼 長 吉住子、嘉兵衛尉、正徳  
 廣 貞 初代廣貞二子、相右衛門尉  
 廣 定 右相右衛門尉子、甚右衛門尉  
 吉 貞 二代忠吉類、兵部左衛門尉、佐賀住、元和、或云初代忠吉異  
 吉 貞 母兄  
 吉 貞 吉貞子、正保  
 吉 貞 右の子、内藏助、禄文  
 吉 久 二代吉貞子、太郎兵衛尉、或云三世吉貞子、元祿

忠 清 二代忠吉類、或云云ふ弟子、新右衛門尉、寛文  
 忠 清 二代、初治國、下總大掾、寛文  
 忠 宗 忠清三代、相模大掾相模守、寛文  
 忠 宗 忠清四代、儀右衛門尉、享保  
 吉 長 二代忠吉類、五左衛門尉、佐賀住、寛永  
 吉 長 五左衛門尉子、武左衛門尉、寛文  
 吉 房 二代忠吉類、淺右衛門尉、左賀住、初忠房、寛永  
 吉 房 右二代、七郎左衛門、佐賀住、貞享  
 忠 政 二代忠吉類、織部丞、佐賀住、寛永  
 忠 政 右二代源兵衛尉、一名忠正、佐賀住、元祿  
 吉 廣 二代忠吉類、藤原又源、伊勢大掾、承應  
 吉 政 右二代、一名吉定、伊勢大掾、元祿  
 氏 廣 吉定弟、越前大掾、貞享

勝 廣 二代忠吉類、六左衛門尉  
 廣 國 同、或は云ふ忠廣弟子、正右衛門尉、承應  
 吉 清 千左衛門尉、寛文  
 廣 重 二代忠吉門人、左馬丞、萬治  
 吉 信 初代忠吉婿、彌七兵衛尉、元和  
 正 廣 吉信子、佐賀住、河内大掾藤原、傳次郎、寛永、寛文、初  
 正 廣 名正永  
 正 廣 二代初め武藏守正永、後河内守藤原、寛文、元祿  
 正 永 三代備中大、廣永、貞享  
 正 廣 四代初名武雄、河内大掾、寛永、享保  
 正 廣 五代初名正永、河内守、寛延、明和  
 正 廣 六代忠吉子、佐傳次郎、天明、寛政、享和  
 廣 吉 初代正廣門人、助右衛門、寛文  
 正 秀 同、傳右衛門

正 次 同、與右衛門、肥前國住、寛文、天和  
 廣 次 同、德右衛門、平戶住、又相州住、平戶左衛門、萬治  
 廣 次 二代肥州住、天和  
 廣 次 肥州住、享保  
 行 廣 吉信二子、九郎兵衛、出羽大掾、又出羽守藤原、一文字  
 行 廣 打安藝住、寛永、天和  
 行 廣 二代初行永、出羽大掾、出羽守、間崎住、貞享、元祿  
 行 廣 三代初行永、出羽守、元祿、享保  
 行 廣 四代初行永、源藏、明和  
 行 廣 五代藤馬、亟六世忠吉弟子、天明、享保  
 行 清 二代行廣二子、佐賀住、彌五郎、享保安永  
 廣 任 初代行廣二子、佐賀住、一文子、寛文、正徳  
 廣 任 二代佐賀住、一文字、享保、元文  
 行 永 初代行、廣門人、佐賀住、寛文、貞享

西海道鍛冶傳系

宗	宗	忠	忠	忠	廣	忠	吉	吉	宗	行	行	行
平	平	國	國	國	貞	長	長	長	長	滿	永	永
同肥前住藤原、	初代廣貞門人、肥前佐賀住佐波大掾藤原、	四代播磨大掾藤原、	三代肥前國住播磨守藤原、	廣貞子、肥前國住播磨大掾藤原、	忠吉子、吉貞弟相右衛門尉肥前國住人藤原、	初代吉長衆門人、一名忠永、肥前佐賀住、	二代肥前佐賀住藤原、	宗長子、初代忠吉弟子肥前佐賀住藤原、	埋忠明壽弟子肥前國住、	初代行廣門人、佐賀住、	三代藤原、	二代後行廣、佐賀住、
正徳	延寶	享保	貞享	入道休鐵、明暦寛文	後改吉	彫物上手、寛	寛文	彫物上手、寛	彫物上手、寛永	正徳享保		享保

### 肥後國

肥後國には河内守源永國、藤原千力、松村昌直、延壽國昌、延壽國秀などの稍勝れたものがある。然し古刀の盛時は見るべきもない外の新々刀は、有宗最も上手、宗吉は匂ひの深きものである。

●昌直 熊本藩士松村英記、安永

昌廣 昌直門人、文化

●有宗 元平正秀兩門人、熊本藩士、沼田英記、文化、文政、天保。

宗吉 弘化

直廣 有宗門人、小山壽太郎、同田貫とも打つ、また宗廣、直光、弘化。

直宗 同門、豊前中津藩士、中西氏、弘化

▲その外正房(文化) 國秀(享和) 國幸(文政) 正次(文化) 宜勝(弘化)などの數治工がある。

▲日向國には肥後延壽の門人松山徳次(天保) 井上眞改末大道(天保)正  
幸門人の良則、良景、良門、良包、正得などがゐる。

▲大隅國には慶長頃の重録一類、國清一類などが居り、また種子島にも  
木下にも蒲生にも居たけれども、左程現はれたものは無い。

薩摩國

薩摩國には主水正正清といふ大業物の鍛工がゐる。正清は初め清

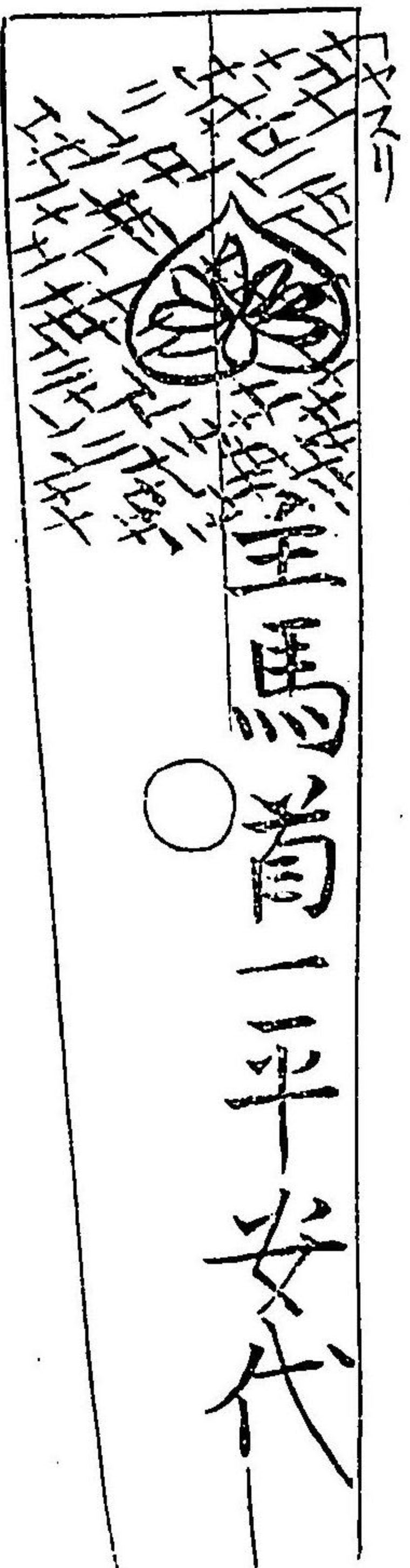
薩列住藤原正清

左衛門、後覺大  
夫と改む。享  
保五年、葵一葉  
を切ることを  
許されたので、  
之れを鉦元はきもとに  
切り、主水正清

主水正正清

正と改めたその作は地鐵細やかにして青みを帯び、底に小肌があつて  
美はしく、荒沸小沸多く、匂深し、直刃、大のたれ、地の中へ入りて美事なも  
のがある。銚子は火燭のこと立伸びて丸く、切鑢にて左勝手の筋違ひ  
は角、そのヤスリも平と同様、忠の刃及び棟の方は、共に少しく面を取る  
鎬高く、格好よりは重い。山田淺右衛門が大業物に擧げた人で、主馬一  
平安代と共に、薩摩に於ける二大傑作家で、而して全國の名取りである。  
其子に正良まさよしがある、地鐵鍛ひ父の正清に似て、安永其中の名工と稱せら  
れてゐる。

正清、子ハ正正  
正正ハ門下ナリ



主馬首  
一平安代  
は大和守  
平安行の

門人玉置小一郎といふのち一平と改む。享保八年、正清と同じく徳川

八代將軍に召され、江戸濱御殿に於て刀劍を鍛へ、葵章を賜はつたといふ名譽の鍛冶である。其作は地鐵細やかにして荒沸、小沸多く、匂甚だ深し、銚子は火焰、丸く締れるものは少し、忠の先は丸く、銚目の上の菱垣、凡て美事の出来、東山美平と位を争ふ。

●正房は美濃關の丸田若狹守氏房の子である。氏房薩摩に來り、兵右衛門と稱す、嫡子正房また兵右衛門と稱して正藍の譽れがあつた。大

# 薩州住藤原正房

業物主水正正清の師であつて、正清よりは沸強く鍛ひも深い。薩摩に於ては

新刀の第一人と稱す。のち數代あり、その門から名人の輩出すること多し、然し主水正の感化が多いと見えて、みな名工の中にゐる清一も、一平藤原安在も、元平、元武、元安父子三人も、實澄もみな正清の風があつて、子の正良と同列にゐる。

奥太郎國平からは忠重が出てゐる、忠重は正清、安代、正房よりも上作であるといふ人もあるが、之れは華美な處を稱したのではないかと思ふ。太刀銘に切物多く、銚は荒くして美事である。波平の一派。

安廣は地鐵細やかにして、安明は地鐵強し、これは良き鍛、安常は勝れた腕、元平は一平安代の

# 波平大和守平安國

た腕、元平は一平安代の作に似て、甚だ勝れた作

人であるといふ。二人直の嫡子、位は正良と同じといふ。

清方、之れも上手地鐵乾きて沸多し、京師伊賀守金道の門人ともいふ、その外名ある輩數工ある。

●氏房 丸田兵右衛門丸田備後守藤原、本國尾根。或は美濃關、若狹守氏房弟子、鹿兒島住入道、道與、天正慶長

氏房 二代丸田惣左衛門薩州住藤原、慶長元和寛永

氏房 三代丸田惣左衛門薩州住藤原、寛永寛文

氏房 四代丸田倭右衛門薩州住藤原、寛文

西海道鍛冶傳系

正房 五代丸田惣左衛門薩州住藤原、天和貞享初名正冬又正商  
 正房 六代正峯弟薩州住藤原、丸田彦兵衛享保寬延  
 正房 七代丸田惣右衛門薩州住藤原、安永  
 正房 八代丸田惣右衛門薩州任藤原、政文化  
 正峯 丸田倭右衛門薩州住、早世  
 正房 初代氏房門人初氏房丸田兵左衛門薩州住藤原、又伊豆守藤原、慶長寬永惣左衛門又備後守氏房二子  
 正房 伊豆守二代丸田孝兵衛薩州藤原、萬治  
 正次 伊豆守二子丸田平左衛門薩州住、或云正良二子寬文  
 安行 伊豆守門人樋口三郎兵衛大和守波平、寬文系別出  
 正廣 伊豆守門人染川太郎左衛門鹿兒島人後京和門人河內守門人、承應明曆  
 正繩 同岩元勘右衛門鹿兒島人後京丹波守吉道門人丹波守行道と改寬文  
 善長 同是枝、坊山伏、坊、院薩州國府住又隅州住、奧忠清二子、永  
 安貞 同薩州給黎郡住中村一平藤原、一平山城守藤原、初波平安行門人貞享

氏房 初代氏房門人丸田休兵衛日州住、都之城住元和或云初代氏房子  
 氏房 同田中三右衛門薩州住、寬永  
 氏房 田中休七隅州住、寬永  
 氏房 同隅州橫川住、初若狹守氏房弟子慶長同名四世、同東與左衛門隅州高隈住慶長  
 重包 五代正房門人薩摩國住、奧太郎藤原、與次郎左衛門後惣兵衛初名忠金又包善元祿寶曆  
 國平 五代正房門人初清盈又吉景薩州喜入住宮原清右衛門後覺太夫薩州住原、主水正藤原、享保  
 正清 正清子宮原清兵衛薩州住、享保天文  
 正豐 正清門人初名正道弓削藤作後五世正房弟子  
 清一 同科木太藏薩州住、享保  
 元貞 同初名忠寄薩州住、忠清孫奧孝左衛門貞享寬保系別出  
 正盛 同初名正道薩州住喜入傳弓削藤作享保元文  
 正良 同薩州住、出水住上原十左衛門享保系別出



正 永 同薩州平佐住、元野翺太右衛門享保

正 則 同薩州住、朝倉甚五兵衛享保

安 行 石見守安張子伊豆守正房弟子橋口三郎兵衛大和守波平、大和守平守平、薩州谷波平 寬文延寶

伊 兵 衛 安行子、非刀匠

安 周 伊兵衛子、橋口四郎左衛門波平、寶永元文

行 光 安周子、橋口四郎左衛門波平、寶曆明和

行 周 行光子、初行高、橋口四郎右衛門波平、後行安享和

安 正 安行、二子初安吉、橋口兵右衛門波平、元祿

安 元 安正子、橋口長兵衛、後兵右衛門波平、初安休享保

安 明 安元子、橫口伊兵衛、平覺波平、安永天明

安 廣 安元二子、二子始安常、橋口清左衛門波平、享保

安 國 安行三子、橋口四郎兵衛、後三郎兵衛波平、大和守平、元祿享保

安 常 安國子、初安和、橋口四郎兵衛波平、寶曆明和

安 在 安國二子、橋口山助、波平、寶曆

安 行 安常子、初安又安氏、橋口勘之丞、波平、享和

安 好 安行子、橋口勘助、波平、文化文政

安 在 安行二子、橋口山助、波平、寶曆

安 代 初代安行門人、王置小市、後一平主馬首藤原朝臣、波平派安貞子、薩州喜入住、享保

正 良 伊豆守正房弟子薩州住、出水住、上原十左衛門元文寬延、初波平安周弟子、後鹿兒島住

正 良 二代薩州藤原、上原十左衛門、後伊地知八郎左衛門寬保寶曆

正 幸 三代初薩州住、平正其薩州官工正其、後伯耆守平朝臣、伊地知平守、安永文化、或明和寬政

正 國 四代切正其、薩州住、緒方強平太、文化

忠 清 薩州住、奧次郎兵衛、寬永

忠 安 忠清子、奧孝左衛門、非刀匠、承應延寶

元 貞 忠安子、五世丸田正房弟子、初忠寄、奧孝左衛門、薩州住、寬保

元 直 元貞子、奧次郎兵衛、薩州住、元文安永

- 元平 元直子、孝左衛門、薩陽士奥氏平、薩陽士奥、奥大和守平朝臣、寛政文化
- 元寛 元平子、六郎、薩陽士奥、文化
- 元武 元直二子、正左衛門、薩陽士奥氏、安永文化
- 元安 元直三子、次右衛門、薩陽、安永文化
- 元房 元武子、武右衛門、薩陽奥、文化
- 善長院 忠清二子、繼是枝氏、隅州住、伊豆守正房子、寛永
- 忠重 忠清三子、奥主左衛門、初名秀興、薩州住、秀興、奥和泉守谷山波平、和泉守、奥薩州住、奥和泉守、寛文元祿、奥和泉守、寛文元祿
- 正貞 忠重子、奥小左衛門、薩州住、元祿

此外各系譜の末流新々刀作者少なからず、

▲對馬國には藤原清俊といふがある。

▲その外生國不明の鍛冶少からざれど紙數の都合によつて略す。

附録

正宗研究

岡崎五郎入道正宗は、天下の人が古今の名人と思つてゐる鎌倉時代かまくらじだいの劍工である。正宗の名や隆たかし矣。或は演劇に仕組まれ或は講談かうだんに述べられ、或は小説せうせつに編まれ、三尺の兒童と雖も、尙ほ其人物を腦中に描くを得るのである。而も正宗の事跡たる極めて、茫莫として前後矛盾、其の傳歴系統の如きも、俄にはかに捕捉ほくそくするを得ず、専門の歴史家と雖も、今日之を斷定することは出來ないのである。

水府の學者青山延光延干の子は「刀劍録」を著して正宗は天下劍工の宗師、正宗の刀は曠世の名作なりと書いたが、昔は鑑定家今日にては愛刀家ならざる限り、正宗の作は實際天下の名作なりと思つてゐるもの

が多く、舊來武家の重代、若しくは家祖傳來の刀は皆此の正宗になつてゐる事、傳寄的の小説とも云ふべき程であるが、而も今日、正宗の事を研究して之れが來歴を探らんと欲するも、其の據る處は、有り來りの「古刀銘鑑」「本朝鍛冶考」「古今鍛冶備考」「古今鍛冶銘早見出し」の類だけで此の外には珍奇な史書も傳はらないのであるから、到底先人未發の意見を發表して、人を驚すこともできないが、是等の諸書に據れば、臆げながら此の人の史跡を辿り得られぬこともない、依て予は是等の古書に就き、正宗は將して世人の言ふ如き名人なるや、正宗の作は其の如き天下の名作なりや、少しく研究して見ようと思ふのである。

### △正宗は唯一人なる乎

天下正宗は唯一人なるかと云ふに決して然うではない、下に正宗の同名異人を擧げて置かう。

▲正宗 岡崎五郎入道と號す、相模鎌倉の刀匠にして初代行光の子、正應嘉曆年間の人也。宇内を周行して鍛工の蘆奥を究め、刀治中興の祖と稱せらる。或は云ふ新藤五國光の門人、正應建武年間の人又云ふ文永元年生れ、康永二年歿す、歳八十なりと。(本朝鍛冶考等)

▲正宗 相模山内の刀匠にして永正年間の人なり、是れを山内正宗と稱す。(古今鍛冶銘早見出)

▲正宗 武藏恩方村下原の刀匠にして大永年間の人也。或は、云ふ爲吉の門人にして、觀應比の人なり、其子正宗は應安比の人なりと(本朝鍛冶考等)

▲正宗 藤原氏土佐守と稱す、武藏下原の刀匠にして天正年間の人なりと(古今鑑明銘早見出)

▲正宗 武藏下原の刀匠にして藤原氏、陸奥守又土佐守と稱す。慶長年間の人なりと(同上)

▲正宗 備前の刀匠にして徳治年間の人なり、後國宗と改むと(同上)

▲正宗 貝氏、備後三原の刀匠にして、延文年間の人なり、或は云ふ正家の

子にして貝の初代、後備中に住す良和比の人と(本朝鍛冶考)

▲正宗 貝の二世初めの名は正貞備後に住す、永徳年間の人也(早見出)

▲正宗 同三世、文明年間の人也(同上)

▲正宗 山城宗達磨鍛冶の重光及子正光共に正宗に切る、重光栗田口吉光の子とも云ふ、世に達磨正宗と稱するものにして、正宗と稱する人の最初也。

即ち知る可し、五郎入道正宗は一人なれども正宗と稱する鍛冶は前後十幾人あるをや。尤も其盛名を恣にするもの、五郎入道の正宗なる事勿論であるけれど、單に正宗と稱するは此の如く多數であるから、初心の人は兎もすると誤を生じて、正宗と云へば、單に五郎入道の如く考ふるものが多いのである。否、初心ならずとも正宗研究には各派の正宗を参考とせねばならぬ、此所には其の比較は擧げぬけれど、名前だけは故らに記して置いた。

### △正宗の年代及び系譜

五郎正宗の系譜は、上に擧げたやうに、正應嘉暦年間の人であるといふ説と正應建武年間であるといふ説と、文永康永年間であるといふ説の三派がある。それで若し、本朝鍛冶考記者が云ふ如く、康永二年に八十二歳で歿したとすれば、龜山天皇の弘長二年に生れたのでなければならぬ勘定となる(故にその記者が文永二年に生れたりとするも誤謬で、文永は弘長の後茲に四年の相違がある)。假に之れで推定して、正宗が刀を打ちし時を考ふれば、正應元年は正宗二十七歳に當り、嘉暦の三年は六十七歳に當るから、八十二歳説とは相納れない。次に正應より建武とすれば、建武の二年は七十四歳に當るから、これも八十二歳とは吻合しない。而らば此三説は如何なる據り處を有してゐるか知らないが、他に何れか一つの反證の上らざる限りは、何れも首肯し難いもの

となる。次に其系譜は如何に記するかを見よ。

●大進房 建長永仁三年の銘あり

行光 文永、嘉元二年、元の銘あり

●正宗 正應、嘉暦三年の銘あり

秋 廣 正安二年の銘あり

其所で叔父の大進房と父の行光と正宗との年代を比較して見ると、大約の事が分るが行光も年代審らかならず(一)嘉元元享年間説と(二)正治弘安年間説(三年歿すと(三)正應元徳年間説とあつて、何れを是とすべきか、其の取捨に迷ふ程であるから、俄に確定説を持出すことは出来な  
いが、若し弘安三年に八十三歳で歿したすれば、弘長二年六十五歳の時  
正宗が出生した譯にならねばならぬ。文永元年ならば尙更歳が増し  
て、六十七歳の誕生にならねばならぬ。それも可、若し正宗を正應元年

の誕生とすれば、父の行光、歿後九年目骨が土になつた頃に呱呱の聲を  
擧げたこととなる。故に正宗の正應誕生説は二つとも誤で、之れは刀  
を打つた時代となり弘長二年の予の説が正しくなるのである。従て  
行光の死も弘安ではなく、元享以後(雲知銘集には元享二年の作ある由  
を掲ぐ)で、矢張第一の元享以前、仁治間の刀工かも知れないのである。  
故に若し系譜に掲げた行光の年代で考へて、三十年を一世と爲し、父子  
の間を之れで計れば弘長より元享まで六十餘年あるから、正宗の誕生  
は、行光が二十五歳の時で(假に八十三歳にて歿すとして)且つ二十歳前  
後より刀を鍛へしとして丁度寛元前後の誕生に當るのである。それ  
で念の爲め行光及正宗の生死を定めて置かう。

行光 寛元より元享前後、八十三歳

正宗 弘長より康永前後、八十二歳

即ち正宗は行光が二十五歳までの内に誕生したのである。

### △行光及び正宗の時代

寛元年間より康永年間までは、正に百年人生五十の率には好く相納るゝのである。而して此の間の歴史は如何と云ふに仁治は四條天皇の八年にして刀劍界に有名なる後鳥羽上皇の隠岐に崩御ましました翌年、北條泰時執權の時代、茲に六年を経て、時頼入道現はれ、時頼十年にして偉傑時宗現はれ、其二十六年目に舊日本の最大難事なる元兵の來寇があつたのだから、幕府の膝元なる鎌倉にありし行光は、刀劍鍛錬の爲めに日々多忙なる生活をしたのであらうと思はれる。行光は其頃三十七八若しくは四十歳ならんか、正宗は未だ二十歳位の青年で、自ら先んじて鎚は振らなかつたらうけれども、矢張父に従つて多くの仕事を營んでゐたと想像せらるゝ。越えて正宗五十七八歳の頃、即ち其の盛時と思ふべき頃、北條氏滅びて世は新田、足利氏の抗争となり、所謂元弘建

武の戦亂南北兩朝の對抗となつたが、正宗如何ばかりの鍛刀を試みしや、記録の得て徴すべきが無いから解らないけれど、必らず人目を驚かすものがあつたのであらうと思はれる。

凡そ刀劍が世の需要に従つて起つたことは、言ふまでもあるまい。去れば戦亂の時代には、其の時々の武士の使用するもの頗る多く、獨り古刀のみならず、新刀の業物と稱せらるものなれば、必らず、その佩用する處となつたに違ひはない、今之れを「太平記」に就て見るに、同時代は弓薙刀の多く用ゐらるゝものがあつたけれど、尙ほ刀劍も重用されて、楠正成に於ける備前景光、新田義貞に於ける鬼丸の作者粟田口國綱、阿蘇大宮司維澄に於ける來國俊、名作阿蘇の螢丸、足利尊氏に於ける篠作の名作(則宗)など、何れも所謂新刀多く古作は則宗だけで、其他の佩刀も亦新作が多かつたのである、今其内の二三者を擧げると、

▲景光 初代は元弘二年の作あり、此年笠置陥る。

▲國綱 建仁、弘長頃まで生存すと、弘長は五郎正宗の生れし年也  
▲來國俊 嘉曆二年の作あり、此翌年日野資朝佐渡に流さる

此所に於て、一つの異論を生ずる。前に云へる如く、正宗弘長二年に誕生せしものとすれば、元弘二年は正に七十歳となる、之れより後康永二年まで、尙ほ十二年、刀を打ちしとすれば、而して當代の名人にして、其の鍛刀が稀世の逸品なりしとすれば、同時代に打ちし備前景光の重用せられし如く、尙ほ當代名將勇士の佩刀とならねばならぬのに、「太平記」は無論の事、櫻雲記にも、梅松論にも、正宗の名は一つも無く、今日彼れよりも名聲なき鍛工が、往々にして記載されてあるのは如何なる理由か  
と。

茲に於て人は大いなる疑問をその胸中に生じ、能はぬであらう、景光來國俊同時代に刀を打ちて、而も當代の記録に残り、正宗獨り此所に現はれなかつたのは、畢竟正宗が、平凡の鍛工に過ぎなかつたのではない

かと將して其の通りとすれば、正宗の名も尊敬するに足らず、正宗の刀も愛玩するに足らないと、誰しも思ひ浮ぶのである。

### △正宗の門人と其流派

然し正宗は心を刀劍鍛冶の研究に潜め、志す處は全國の粹を集め、諸流の術を総合し之を大成した人であつて、建武の初めに諸國に出で、一たび歸りて又七十五歳の時國を出で、二年にして歸る(銘盡大全)とあり、新井白石も「軍器考」に「正宗國々を巡りあるきて鍛工どもの家々に傳ふる處を受けて始めて筆に記した」ことを傳へ、刀劍鍛冶の術に於ても、正宗と粟田口吉光とは、本邦刀劍界にあつて、二大流派の源泉を爲したのであると云つてゐる。又傳に曰く、既にして正宗は孤筈をあげて五畿八道を週遊し、諸名工の家法を訪ひ、終に天下の名匠となつた。正宗の名聲全國に籍甚たるや、風を聞いて來り學ぶ者多く、其の門弟中には、養

子貞宗を始めとして、後來巧技を以て全國に鳴り、若しくは刀劍鍛冶の流派を開きたる者あり、就中山城長谷部の國重(建武)大和の包氏後に美濃の志津三郎兼氏(元應)美濃金重(元應)越中松倉の人郷の義弘(元應)同く吳服住則重、筑前隱岐の濱の左衛門三郎(即左にして之大左なり)備前長船の長義(建武)山城の來國次、石見の直綱など云へる名匠が集まつた、又正宗の養子なる貞宗の門下に山城の初代信國、但馬法城寺の國光、備後の友行など云ふ名匠が出た。正宗刀を鍛ふに古人未發の技巧を施してより、子孫門弟皆其の法を遵守し相模の人秋廣、廣光も又並に業を正宗父子に受けて併せて、當代の大家となつたと、此の傳説に依て正宗を主としたる所謂鎌倉鍛冶の枝流若しくは其の系統を引ける鍛冶の流派をあげると大約左の如くなる。

▲長谷部國重 正宗弟子山城長谷部派の祖なり

▲兼氏 志津の祖なり

▲金重 美濃の一派なり

▲郷義弘 の次には義眞、爲繼、爲次などの一派を存す

▲眞綱 石見の一流直綱の一家一門は石見全體の刀工となる

▲長義 備前の長義は又一流の祖

▲左 左衛門三郎、之所謂左文字の一派なり

其れ斯の如く、正宗の門下には、他の企及し得ざる刀工の現はれたるは、正宗の將して疑ふべき無名の作家なりしや、否や或者は慶長十六年出版の「古今銘盡大全」に記載したる「秘談抄」の註に記したる注進物の中に「諸國に勝れて物の切れたる支證多きを聞き及び探りて先代々の時記し定め置かれしなり」と書いた名刀六十刀の中、名をあげたるは、山城の宗近を初筆として備前の是助、青江の恒次、綾小路定利、筑紫清眞に及ぶが、其中に正宗、貞宗、義弘の名の無いのを以て、正宗は無銘の作者なりとするけれども、此の注進物を書留めたのは正和二年正月十一日の事であつて、正和は花園天皇の五年、乃正宗五十歳の頃であつて、正宗が天



下を週遊して、各派の特長を取り、以て鎌倉鍛冶の特技を開いたのは七十歳以後の事と思はるゝから、正和二年の注進物の中に正宗の名が無いと云ふて、強ちに正宗の下工なのを断定はしがたいのである。況んや、貞宗義弘、則重などの其の内に集まつたのは、天下週遊後の事であるから、此處に名の現はれないのは或は當然の事であるかも知れない。

△正宗將して下工なりや

正宗が生存中、その名の現はれないのと、正和二年の注進物に名の無いのとは、正宗を優れた名工としない唯一の論點であるが、其外にも足利三代義滿の時、宇都宮三河入道といふ當時の鑑定家が、義滿の命を受けて然るべき物といふ名匠六十人選擇した中にも、正宗の名が無いと云つて。

鹿苑院殿宇都宮三河入道參候しけるに、仰出されけるは、人に御太刀

下さるゝをば諸侍重大にもすべきか、然るに物の切れざらんを下さる事、然る可らざるの間、可然物を記し申すべき被仰と、やがて御前にて記し進上申すなり。

と云へる文句を引き、此の六十刀は、京備前備中のみにて相州物は一刀もない、勿論正宗、貞宗なども無いから、是れも疑ふべきことであると言ひ更らに慶長以前の名將は、正宗の刀を佩はなかつたから、正宗は當時名があつた刀匠では無いと言つて居るけれども、恠う論破するならば、正宗下工論を唱へるより、寧ろ正宗は無い人であると云ふ、正宗沫殺論を唱へた方が好いのである。

鎌倉以後、足利家重代の刀には名刀が少なくない、鬼丸國綱、大典太光世、篠造則宗、不動國行、豊後行平、骨喰藤四郎など云ふものが澤山あるけれども、正宗の刀が重代の物となつたといふ事は無い。織田信長も著名の愛刀家であるけれども、正宗の刀を帯びたといふ事は歴史にない。

上杉謙信も愛刀家であるが、正宗の刀を佩びた事は聞かない。小田原北條家五代の間に正宗の噂は、三浦義純が持ちたりといふ一事のみである。と云つて、正宗の尙ほ疑ふべきを説くけれども、之れも洙殺論で、正宗を生かす議論ではない。今日正宗の作として世に存在せるものは大略左の通りである。

▲籠手切正宗 織田信長の愛刀、磨上二尺二寸六分半、松平加賀守殿、

▲三好正宗 前田利家

▲俱利伽羅正宗 豊臣秀頼自殺の刀といふ、無銘八寸四分、代金五千貫、紀伊家、

伊家、

▲振分髪正宗 伊達正宗の愛刀、石田三成より結城秀康に送りたる刀

▲太耶作正宗 二代將軍秀忠の秘藏、磨二尺一寸二分、代金七千貫、松平加賀守殿、

賀守殿、

▲蜻蛉不留 正宗作槍

▲親世正宗 磨上二尺一寸三分、代金七千貫、御物、

▲三日月正宗 土屋子爵の家におり、元武田信玄の佩刀

▲會津正宗 藩生氏郷の佩刀、磨上二尺一寸六分、御物

▲桑名正宗 本多平八郎忠勝の所持、

▲本庄正宗 徳川家の重器、磨上二尺一寸五分半、御物

▲豊後正宗 立花宗茂佩刀、無銘八寸、大久保加賀殿、

▲島津正宗 島津義弘公佩刀、

▲大垣正宗 水野勝成所持、二尺一寸一分、

▲小松正宗 無銘九寸七分半、代金七百枚、松平加賀守殿

▲和歌山麿の森正宗 朱銘九寸四分、代金三百枚、松平安藤守殿

▲岡山正宗 無銘八寸六分、代金五百枚、松平筑前守殿、

▲朱判正宗 「朱銘」一尺二寸、代金五百枚、紀伊家

▲前田正宗 無銘九寸五分、代金七千貫、同

▲夫馬正宗 無銘八寸九分半、代金二百貫、加賀藤和泉守殿、

▲伏見正宗 無銘八寸五分、代金三百枚、松平若狹守殿、

▲金森正宗 無銘八寸三分、代金三百枚、御物

▲九鬼正宗 無銘八寸一分半、代金三百枚、紀伊家、

- ▲日向堅田正宗 無銘八寸四分半、紀伊家
- ▲道意正宗 無銘八寸七分、代金二百枚、御物
- ▲堀尾正宗 無銘九寸三分、松平薩摩守殿
- ▲宗端正宗 無銘八寸六分、代金三千貫、御物
- ▲一庵正宗 無銘八寸二分、代金三千貫、同
- ▲小池正宗 無銘一尺二寸半、同
- ▲不動正宗 「在銘」八寸六分半、尾張殿、
- ▲毛利正宗 「象眼銘」二尺三分、半代金百三十貫、土岐丹後守殿、
- ▲小玉正宗 無銘七寸一分半、代金千貫、尾張殿
- ▲庖丁スカシ正宗 銘七寸一分半、内藤左京亮殿、
- ▲庖丁正宗 無銘七寸二分、代金百枚、松平下總守殿、
- ▲庖丁正宗 無銘八寸、代金六十枚、尾張殿、
- ▲藤屋正宗 「朱銘」八寸半、松平、薩摩守殿
- ▲若狹正宗 磨上二尺二寸六分、代金千枚、御物、
- ▲式部轉原正宗 磨上二尺七寸半、代金七百枚、松平大和守殿、

- ▲後藤正宗 「象眼銘」二尺二寸八分、代金七千貫、同、
- ▲敦賀正宗 磨上二尺三寸三分、代金七千貫、本平薩摩守殿、
- ▲中務幸名正宗 「象眼銘」二尺二寸半、代金二百枚、御物
- ▲池山正宗 「象眼銘」二尺二寸二分、代金二百枚、尾張殿、
- ▲早川正宗 「象眼銘」二尺三寸七分半、代金五十貫、御物
- ▲武藤正宗 磨上二尺四寸四分半、代金五千貫、御物、
- ▲福島正宗 「象眼銘」二尺二寸九分、代金八十貫、海野但馬守殿、

以上銘物四十五本の中、眞の在銘物と稱するは尾張家に傳はつた、不動正宗一本のみで、外は皆無銘か若しくは象眼銘である。それ計りでない所謂「名物帳」には正宗は總數五十六刀あつて、それに水戸の十一刀加賀の八刀を加へ、尾州、紀州、上杉、鍋島、黒田、田安等諸家の藏刀を加へなば、少くとも二百刀はあるといふ、本阿彌家の臺帳に書留めたるものも五百有餘に上ると云ふに、在銘物はその十分の一にも達しないのである。して見れば、正宗技功論よりも、勢ひ正宗有無論が起らねばならぬ。

譯である。

### △正宗出現と其價格

已に説く如く、正宗は在世中の足利時代にも、武士の佩用する所とならず、其の存在をすら、後世の人に疑はしむるのであるが、爾來二百四十五年、豊臣秀吉天下を統一するに及びて、初めて世の賞翫する所となり、若狹正宗、三好正宗、長銘正宗、大内正宗(以上短刀)の如き名物を出したけれども、足利時代にあつては、其列位も高からず、代付も頗る安かつたのであるといふ。正宗の名初めて史上に現はれたのは、應永二十年の頃「尺素往來」に、刀は誰々と記し、其の末に正宗盛高と並稱したのが初めてで、盛高は筑前の金剛兵衛、今日にては下作に位する刀で、年代は正應頃であるといふから、正宗存在中の作家である。また「川角太閤記」は寛永の頃、徳川氏の古老が秀吉時代の話を集めたるものであつて、此の書中

には正宗の名が折々見えただけれども、今日の如く正宗が有名であつたとは思はれない。又文明中の代付に五千疋と記したのも、古き記事で此の外に正宗の名が現はれたものが無いのである、その時の代付は、宗近、國行、安綱、正恒、真守等の價格付は一萬疋で正宗、貞宗は其の半額の五千疋である、處が慶長十六年の代付となると同じく轉倒して左の如くになつた。

金十五枚	宗	近	金十枚	眞	守
金十五枚	國	行	金五十枚	貞	守
金十枚	安	綱	金百枚	正	宗
金十五枚	正	恒			

下つて廣永寛文より元祿に至つては左の如くなつた。

代金千枚	若狹正宗(刀)
代金七百枚	榊原正宗(刀)
代金五千貫	俱利伽羅正宗(短刀)

代金七千貫

太郎作正宗(刀)

代金五百枚

岡山正宗(短刀)

代金五百枚

朱判正宗(同)

代金七百枚

小松正宗(同)

正宗は斯くの如く高價なるに反して、備前刀、京物は其の半數に満たざるものあり、長光は五十枚、光忠は三十枚、二字國俊は五十枚、景光は二十五枚、定利は二十枚、手搔包永は十五枚、備前國宗は二十枚より五十枚、大兼光は六十枚、大三原は二十枚と云ふに過ぎないのである。

正宗は斯の如く、豊公の時代より大飛躍を試みて、天下の上々作とはなつたが、其の時代以前には世間の人を知らず、後漸く金剛兵衛の列となつたが、未だ名物牒に載る程の名刀とはならなかつた。太閤の時代、石田三成は堀川國廣に命じて正宗の偽物を造らしめ、大名にのみこれを與へたとふ風説のあるのは如何なる譯か、正宗、郷、吉光の三人を以て天下の三作としたのは此の時代で、正宗以前より發達したる長船

一文字等の之れに加はらず、相模及び越中を以て之れを京物に加へたるは、チト不思議に感ずる次第である。

### △正宗の切銘と其數

繪畫に於ける探幽の作と、彫刻に於ける左甚五郎と、刀劍界に於ける五郎入道正宗とは實に不可思議なる史上の人物である。由來少きものは貴く、多きものは珍重されぬ筈なるに、正宗の刀の世に在ると益々多くして、其の價は益々高いのである。天下之れほど奇なることはない。

足利時代には一向に名なく、且つ其の刀數の如きも、有りや否しや疑はしい程であつたが、豊臣秀吉天下を握るに及び俄然として正宗の刀は天下に珍重され、武士の佩刀、凡そ正宗にあらざれば、一大耻辱の如く考へて、伊達政宗の如き英傑すら、正宗の脇差を帶ばざるは耻辱なり」と

て、長刀を磨上げて、振分髪の名刀を作つたのは名高い話である。其他正宗と作と云へば、此の刀は誰某の帶したる正宗なりとて、所持者の名を頭に冠らせて何正宗と云ふこと、榊原正宗、石田正宗、池田正宗、後藤正宗、小池正宗、福島正宗の通りであるが、斯く豊臣時代に至つて、正宗の俄かに多くなり、又正宗の俄に尊くなつたのは、如何なる理由があるのか、之れを満足に解釋するものがあるならば、實に偉大なることと思ふ。前にも言ふ如く、名物牒にすら、正宗の刀は五十六七刀もあるが、眞の在銘物は僅かに一刀のみである。現存する正宗刀も眞正銘に至つては恐らく百分の一にも達しないことであらうと思ふ。昔は本阿彌家に於て折紙を出し、之れを以て正眞の作と認めたら、偕は非常な數にも達したのであつて、正宗の作か初めから、澤山にあつた譯ではない。元來刀に銘を切ることは、大寶以來の慣例である。作の下なるもの、或る時は棄つる考にて無銘となし置く事もあり、天下の名人と言はるゝ

ものが、獨り銘を切らずして後に殘せりと言はるゝ、是れ疑ふべきことではないか、若し又刀を摺上げたものとせば、忠の下部に僅かに銘を殘すか、または短冊銘としてこれを保存するか、折返し銘として其の作者を證明するものであるのに、正宗獨り此の物なきは刀の多數なるに比例して、正宗の沫殺論を稱へたくなる次第である。

古老の曰く、古き名物の刀は切味の勝れたるを以て異名を取れり、藥研を突透したる藥研藤四郎、庖丁を切りたる庖丁藤四郎、鐵砲を切りたる鐵砲切兼光又はニツカリ青江、鈍切長光、小豆わり兼光、荒浪一文字など、枚舉に遑がないけれども、正宗に至つては切味を以て名を取つたものはないと、將して然らば正宗の刀の善惡なるものはその經驗がないと云つてよろしい、前に掲げたる名物牒の正宗刀の名を一見したならば思ひ半ばに過ぎるものがあらう。

### △正宗有りや無しや

正宗は到底疑問の刀士なり、武内宿彌が歴史の迷宮なれば五郎入道正宗も刀劍界の迷宮であらう。故に未だ充分ならざる研究を以て、輕々しき断定は下さぬけれど、要するに正宗の位置に就ては、

- 一、正宗は有りしならむ、然れども今日人の説く如き優れたる名人にはあらず。
  - 二、長谷部國重、志津兼氏、關金重等、所謂正門の十哲なるものは疑ふべし。正宗恐らく劍工にあらず、本阿彌類の鑑定家にあざりしか。
  - 三、五郎正宗は劍工にあらず、後人が作りたる鍛冶神の人格化なり。
- と云ふ三條の疑問を提出したのである。何となれば、正宗の現はれたのは秀吉以後徳川氏の時代である。記録の之れを證據立つるものがなければ、暫らく之れに依て往古を追考しなければならぬ而して

之れを講究した所が上述の如き結果を生せしむるのである。予は正宗が鍛冶神の人格化なるべきを深く信するものなるが故、此の點に向つて大に講究する積である。而して又諸賢子の高説を茲に乞ふかも知れない、今日では唯疑問だけを提出して置くのである。

## 刀劍問答

此の刀劍問答は嘗て著者が東京日々新聞に掲載したものである、今新刀に屬するものだけを記載して、讀者の参考とする。

雲州住大明京在銘一尺六寸三分の刀、八十錢にて買入れ、鐵板を切り試みたるに二枚共手答へなく、斷ち切られ候、此の大明京は朝鮮の歸化人なるやの脱もあり候が、如何なる經歷の刀匠にて何時時代の人に御座候哉、御垂示を願上候(壑北經步道人)

▲大明京は成程出雲の刀匠であつて、姓は高麗と稱したから、歸化人か

も知れないが、それは當人でなく其の祖先であるかも知れない、初代三代ともに名を國重と云つたが、初代は彌九郎、二代は治兵衛と稱した、寛文以後、元祿、享保と年々其名を継ぎ松江白潟天神町に住して刀を打つたといふ、新刀の作者、大抵の出來である。

壽秀作短刀年代作柄同上候(神田愛讀生)

▲壽秀は新刀に三人、京の壽秀は大堀市正と稱し天保、嘉永の人、江戸の壽秀又同時代、土佐の壽秀は江戸に來り水心子正秀の門人となり紫紅子と號す寛政年間の人である。

兼氏作長一尺五寸、又鋸裏には宗典とあり兩者の年代價値の御説明を乞ふ(秋田縣金嘉藏)

▲兼氏は所謂正門十哲の一人なる美濃の志津三郎兼氏もあれば後の志津と稱せらるゝ兼氏もあり、又新刀になつて京都や奥州などにもあるから只兼氏とばかりにてはお答の致しやうも御座らぬ。

邦彦(くはひこ)の一刀買求候是は何時頃の作者に御座候や(横濱初心生)

▲邦彦は弘化年間新々刀の鍛冶、江戸に住す、初名は邦虎、竹中氏と稱した人である。

宇多國次と銘ある刀あり右は來左衛門國次なるや將又何れの國次なるや御取調の上御社新聞紙上にて御答有之度候(秩父郡守屋生)

▲山城の來國次なれば來國次と切る筈、其の子の國次なれば來源國次と切る筈、青江の國次なれば只國次とある筈、豊後の國次なれば豊後州住國次とある筈、お刀宇多國次とあるからには文明年間の人にして、越中國に住した、所謂越中宇多派の二世國次と思はるゝが如何にや。此の國次は大和の宇多鍛冶にて當國に住した國光より出た人であつて、國光の一族は皆宇多と稱して代々名手を出したといふ。國光の門には彼の吳服の郷則重の如き人があり、則重の門には國光の次男なる國房が居た。越中宇多派の刀は象備前に類して龜文が多く、中心の末おくれ、峯も崎も丸い、そのお刀果して此條項に當穿るや否や、好くお調



べあれ。

慶長年代に於ける業者の作者は誰々なるや詳細にお示し下され度候  
(千葉高橋生)

▲慶長時代の刀工も澤山にある、従つて一々説明するのも難事に屬する。然し古書にも新書にも慶長時代と限つて其人を擧げたものはない、故、初學の者には恁う纏つたものも参考にならうと思はれるから、少し煩はしいが重立つた者の略傳を列記しやう。

△國廣 山城國、來の末、城州一條堀河住、信濃守藤原國廣と切る、本國日向國、依肥最上大業物。

△國備 山城國、國廣の門人、平安城住、生國日向、越後守藤原國備と切る。

△國助 山城國、國廣門人、攝州大阪住、河内守藤原國助と切る、本國勢州慶安に至る。

△重國 大和國、手搔包永の末、初め包國、文珠九郎三郎と稱す、和州手搔

住、包國、和州南都住、重國、大和國於駿府住、九郎三郎重國など、切る、後紀州住、元和に至る。

△包保 攝津國、左文字手搔の末、和州住、於大阪包保作、また陸奥守包保と切る、本國大和。

△國貞 攝津國、堀川國廣の門人、攝州大阪住、和泉守藤原國貞、また入道道和と切る、元和、寛永、正保に至る。

△政常 尾張國、美濃、奈良、太、郎の末流、政常二世、相模住、藤原政常と切る。

△綱廣 相模國、永正、綱廣三世、相州住、綱廣と切る、鎌倉住。

△康繼 武藏國、大和、廣長の子、肥後大椽康繼、肥後大椽藤原康繼、越前住、康繼と切る、江州西坂本住、下坂氏、後越前福井住、又武江住。

△國包 陸奥國、大和、保昌五郎貞宗の末流、京越中守正俊の門人、奥州仙臺住、山城大椽藤原國包、老後は用惠九曜を打つ、寛永に至る、或は云ふ國分若林住、名は本郷源藏最上大業物。

△包吉 陸奥國、包國の門人、奥州仙臺住、包吉と切る。本國和州南都文珠一派、阿部甚右衛門と云ふ。

△康繼 越前國、越前肥後大椽藤原康繼、肥後大椽藤原下坂康繼と切る。本國江州西坂本、越前福井住、又武江住、前の康繼を見よ。

△國清 越前國、京堀川國廣の弟子、島田吉右衛門助宗、山城大椽藤原國清、山城守藤原國清と切る。本國信濃、越前住、菊一文字を打つ、元和に至る。

△正則 越前國、三條吉則の末流、大和大椽藤原正則と切る。越前住、又京住、寛永に至る。

△貞國 越前國、肥後大椽貞國と切る。越前住、虎徹の師匠。

△若兼 加賀國、濃州關住兼若の孫、加州住、若兼と切る。金澤住、寛永に至る。

△勝國 加賀國、加州金澤住、橋勝國、また陀羅尼將監藤島勝國と切る。

△國重 備中國、國重二世、備中水田住、國重と切る。三郎兵衛。

△輝廣 安藝國、關兼常の末、初名は兼友、また兼伴、肥後守藤原輝廣、また肥後守輝廣と切る。本國美濃、安藝住、寛永に至る。一説に尾張兼常、天正中、福島氏に従ひ、藝州に住み、輝廣の後を繼ぐと云ふ。

△輝廣 安藝國、輝廣二世、初め兼久、播磨守藤原輝廣と切る。或は寛文。

△重國 紀伊國、手搔包永の裔、大和重國と同人、於南紀重國造、紀州明光山住、重國と切る。元和、寛永に至る。最上大業物。

△重鎌 大隅國、隈州住、重鎌と切る。高隈郷住、東次郎左衛門。

△氏房 薩摩國、丸田兵右衛門、丸田備後守藤原氏房と切る。本國尾張、或は云ふ美濃若狹守氏房の弟子、鹿兒島に住し、入道道與と云ふ。

△氏房 薩摩國、氏房二世、丸田惣左衛門、薩州住藤原氏房、元和、寛永に至る。

△正房 薩摩國、初代氏房の門人、初め氏房、丸田兵左衛門、薩州住藤原正

房、また伊豆守藤原正房と切る、寛永に至る、或は云ふ、備後守氏房の二子と。

△氏貞 薩摩國隅州横川住氏貞と切る、初め若狹守氏房門人。

△重包 薩摩國東與左衛門隅高隅住。

△國重 備中國國重二世、備中水田住、國重と切る、三郎兵衛。

△輝廣 安藝國關兼常の末、初名は兼友、また兼伴、肥後守藤原輝廣、また肥後守輝廣と切る、本國美濃、安藝住、寛永に至る、一説に尾張兼常、天正中福島氏に従ひ、藝州に住み、輝廣の後を繼ぐと云ふ。

△輝廣 安藝國、輝廣二世、初め兼久、播磨守藤原輝廣と切る、或は寛文。

陸奥守兼信の年代列位切れ味及び備前に久國ありや否や、在りとせばその年代切れ味を問ふ但し之れには沸も匂ひも見當らず(丸龜市秀影生)

▲陸奥守藤原兼信は美濃神戸の刀匠、藤原陸奥守と稱す、延寶年間の人

である。作は地鐵細かに小銚匂深く關の新刀の中にては勝れたる上手である。又久國は粟田口や丁戒派許りにあらず、伯耆檜原にも備前長船にも、大隅にも日向にも土佐にあり、備前と見れば元徳年間の久國か、嘉慶年間の一名友國といふ久國ならんか、次に刀に銚や匂ひの見當らぬといふは受取れない、凡そ如何なる新刀にまれ下手は下手なりに銚匂ひのあるものである。古名人の作りしは其等のもの自然に出でたれど、後來泰平になりて刀が茶器と同じ様になりては、刀打つ者も自然手先で拵へる様になり、銚も匂も恐ろしく品が無くなつた。夫れすらも、尙ほ銚匂ひありとすればまして久國とも見らるべき人の刀、銚匂ひの無からう筈なし、お刀恐らくは赤錆で御座らうか。

澁州關兼氏、陸奥守橘爲康、越前住則定の太刀あり、年代作柄御教示を乞ふ(東大久保愛讀生)

▲兼氏は美濃にばかりも六人ある、御問合せのやうでは何の兼氏やら

分らない、陸奥守橋爲康は紀伊の鍛冶、姓は富田六郎左衛門と稱す、父は土佐將監、その二世である、陸奥守に拜す、後大阪に移る、寛文延寶年間の人、新刀の作者、則定は三人、二人は藤原氏、京都の刀匠にして本國は三河、寛永年間は初代、貞享年間は二代、他の一人は豊後の鍛冶、朽網則貞の裔、元祿年間の人、越前の則定は知らない。

小生所有の刀二尺二寸五分直刀にして表銘に萬歲源繼秀裏銘安永五年七月日とあり此の刀の作柄年代御間申上候(牛込刀狂生)

▲繼秀は一人、天明文化の新刀にあるのみ、古刀には聞かず、此の繼秀は藤原姓にして源姓にてはなし、通稱は源次、近江守と稱す、江戸の人である。尙ほ充分の考査を遂げやう。

二王清貞二尺五寸一分、備州長船盛光、應永廿六年八月一尺四分、盛光一尺五寸二分、氏房作一尺六寸八分以上の刀御鑑定下され各自の品評下され度候(茨城土浦菊地萬太郎)

▲清貞は二王派(周防國)にばかり四人ある。古刀の清貞は二王の祖清

眞より三代目、龜山帝文應年間の人、作は下の中位、後ち清光と改む(父も清光と云へり)其後の清貞は天文に一人、永祿に一人、承應に一人あり、御刀は何れの清貞か知らず、盛光は五代初代は師光の子、至徳年間、二代は修理亮應永年間の人、作は下の上、この人に當れり。次の盛光は何れの人か、山城にも美濃にも越前にも加賀にもあれば判断し難し、次の氏房前後二十一人あり、これも判断し難し。

左の二刀の御説明を願上候(一は助宗作と銘し一は助宗と銘す)(陸中育刀生)

▲助宗山城小鍛冶に一人、平治頃の人、攝津に一人、若狹守、通稱九兵衛、承應頃、大阪に一人、新刀にて出羽守と稱す、島田助宗を初代として駿河島田に七人、長享頃、文龜頃、天文頃、天正頃、寛永頃、寛文頃、元祿頃とあり、信州松本善光寺に二人、駿河の六兵衛助宗の子にして寛文頃、二世は仁左衛門と稱す、享保頃、出羽に一人、駿河の六兵衛の子にして島田彌助と稱す、

元祿頃、美濃關に一人、宗次の子にして元弘頃、越前福井に二人、國清同人、備前福岡に二人、初代は即ち福岡大一文字にして則宗の子、承元二年九月の番鍛冶、同長船に三人、嘉吉、天文、永祿とあり、以上二十名だけは同じ助宗であるから、圖面の上で判断することは容易でないが、先づ自分の考へただけを言へば、二字銘の助宗は福岡一文字の如く見え、助宗作とあるは島田助宗であるべきやうに考へられる。然うすれば一文字の初代は元暦二代は承元であるから共に七百年代、島田助宗は天正年間であるから三百年代、貴下の御問合せに符合してゐる。列位をいへば一文字助宗は上々作、島田助宗は中の下位である。

拙者方に千代鶴なる銘の刀有之候御面倒乍ら年代御示教下され度候  
(本宮伊藤)

▲千代鶴は山城來國安の弟子國安が貞和年間越前に還つて千代鶴と打つたのに始まる、去れば二代の國安は越前住千代鶴作と切り、末は應

永天和貞和頃に單に千代鶴と切つたものがある、千代鶴は新刀の作者。

拙家に永正十二年八月日、備州住長船之祐定作と打ちし刀あり品位年代御示し下され候(千葉縣樂洋生)

▲永正祐定業物なれば高價の品なれど、初代は横山與三左衛門、備前國長船住與三左衛門、尉祐定と打ち、二代は備前國住長船兵衛尉祐定と打ち、御刀の備州住と長船之の之字氣に食はず、此の様な銘初代二代に見ねば何とも御答の致様がない。

長光は八九人之れある由其内二字銘の長光は何時のものにして何れが業物に候や、波平派の長光、肥前の長光の特長を御教示願上候、備中國住宗久、裏銘應永の年號を切りし脇差あり、備前の宗久と同人に候や、又作柄お聞せ下され度候(秋田竹溪生)

▲長光は十一人ある、その中備前長船の順慶、長光は正應頃の作者で上々作の鍛冶、六百年代になる。次は備前長船光忠の子長光で、之れは正和頃の作者、五百年代になる。上々作に並ぶべき鍛冶。波平の元暦よ

り應永に至る鍛冶は上々作に列すべき刀であるが、その中の長光は年代審かならず。順慶長光と列すべきものではなからう。次に銘の切り方左近將監は二字銘にも切れど、備前國長光とも備前國住人左近將監長光とも切る。山城平安城の長光は二字銘、大和長谷部の長光も二字銘で、二字銘の長光は澤山あるから、銘の字數を當にして刀の判断をすることは六ヶしい。それから波平の長光を以て竹溪子は順慶と推し並ぶやうに考へて居らるゝけれども、波平の長光はそれ程の作者ではない、而しその作の特長を言へば、順慶の作は太刀姿腰元にふんばりあり、元にて反り、重ね厚く、巾廣きあり、大概樋を搔く、庵淺く、小切先鍛は、柁目細かに、刃の表白くして美しくし、その最も見易きは順慶長光は丁字刃の上手で、その鹽梅櫻の花のみだれたる如くに亂るゝ、けちい稻妻があり、又刃の上には木工あり、華やかに匂ひか深い、而して元は丁字に、先は廣く、理縷すぢに亂れの交りたるもあり、銚子は亂れ映りもあり、大方は太

刀で、忠むね肉筋違鏝である、波平の長光は見ねば分らぬが、波平の作は總別細き直刃で、刀の造りも、龜文の模様も、銚子も彫物も色々あつて、一方には言ひ難いけれど、其中には金剛兵衛か三原かといふ出來のものもあり、又來の作に似たものもある。これにて二刀の御判断あれ、次の宗久は備中備前別人、備前の宗久は永正二年の銘あり、永正より應永までは八十年、その時二十代で刀を打つも尙百歳別人なことは明らかである、作柄知らず。

「日本鍛冶頭善定藤原兼元ふじはらのかねもと之れは二人の合作なりや將一人の作なりや年號列位御垂示下され度候(黒川喜雨)」

▲善定兼元は二人の作ではない美濃の善定兼吉の末である。兼吉は康應年間の作者、善定と號す、故に此の一派は皆善定何某と打つたのである、小生未だ寡聞にして日本鍛冶頭なる受領を知らず、但し京の伊賀守金道は鍛冶の受領を取次ぐので、刀に日本鍛冶宗匠と切つたのがあ

る。且つ此の兼元は何年頃の人なるか不明。

拙家に助光、國包の刀あり、國包は名の下に假名にてアケルとあり、共に拵上物と存せられ候、右は何年位のものに候や、伺上候、茨城縣兼井生

▲助光は前後十一人あるから何の助光か分らない。その中備前一文字左近將監助光は上作此人二代あり、外には大和尻掛の助光、駿河島田の助光、相模山内の助光など聞えたる鍛冶である、備前助光ならば六百年前。次に國包も同銘十三名あり、奥州仙臺十代外に一人、大和千手院派一人、備前信房の子國包一人あつて只國包では分らない。尤も此の中では仙臺の初代國包は上作大業物である、本姓は藤原本郷源藏といふ、山城大椽に拜す、大和の保昌五郎、貞宗の末流、京の越中守正俊の門人である、慶長寛永年間の人、新刀の始めに列する鍛冶である、またアケルとあるは摺上げたるものである。

濃州關善良家越前守吉門銘の刀の作柄年代及び九州肥後同田貫上野

介といふ人の年代御教示願上候(常陸愛刀生)

▲濃州善良家吉門は三代までであるが、初代は水戸公に召されて同地に移り、坂東太郎鎧正入道ト傳といふ、善定家兼吉の曾孫で通稱は金兵衛武藏守と稱した人、寛永時代新刀中の上作に列する。二世吉門は關に住す、坂尾善定家の十三世、正保延寶年間の人である。御所持の刀は此の二代と存する。次の九州肥後の同田貫は人の名でない、肥後菊池の地名である、此の地に住する刀匠が、其の名を略して單に同田貫を所作の題銘としたのである、重に慶長頃まで此の名を冠した。だから新刀の位附では京の埋忠肥後の忠吉など、共に名工の部に入つて居たのである。備上野介は一人の名、同田貫と銘したのは肥後の菊池に幾人もある、これも所の地名である、刀の地鐵ざんぐりとして様々の出來がある。地位は中の下作。上野介は國廣同人、天正中の人、加藤清正の鍛冶であるといふ説がある、上野介の外に同田貫には兵部、右衛門左馬介

など、打つたものがある。

別紙雛形の刀御取調の上御判定下され併せて價格御示し下され度候  
(遠州氣賀町坂田嘉七)

▲雛形は信國裏に應永二月二日(直刃)とあり盛弘作(直刃)とあり、備洲三原住近作(直刃)とあり國次裏に正應五年二月日(但し脇差長幸は一上る裏に梵字(亂刃)とあり)粟田口一竿子忠綱裏に元祿十三年八月日(亂刃)とあり河内守藤原國助、肥前住忠吉(亂刃)とあり都合八本、初めから解説すると信國は前後二三十人もあるから何の信國とも分らないし、且つ應永年間の同名も十數人あるから之れも判断のしやうがない。只刀の姿と銘と刃文とのその鑑、忠など、で調べるのであるが、雛形だけでは未だ考がつかぬ。其の中京の信國は刃文亂れ樋搔き、梵字あり、模様は鎌倉に類して京の地鐵で、その三代は必らず彫物か血漕がある。盛弘は備前長船に一人、筑前金剛派に一人ある。金剛の盛弘は源姓にて源盛

弘と切れば、此の御刀は長船であらうと思ふが、長船の切銘の無いのは何ういふ譯か今考へず、次に三原の正近(ならん)は三原だけでも同銘前後三名あり、御刀の模様、峯忠の工合最う少し説明なければ何代と定めることは出来ない、次の國次は同名四十九人ある、その中正慶年間の國次は聞かず、近き所では備中青江の國次、及び伯耆則國の子國次の二人である、青江の國次は寶治頃で正應と隔たること約四十年、伯耆の國次は慶長頃で約廿三年であるからこれは伯耆の國次かも知れない。然しその御刀は梵字あり、亂刃にて鈍子丸く、忠は栗尻であるやうである、將して此の刀に當るや否やは紙上で判断することは出来ぬ。次に長幸二人、一人は石堂派にして寛文頃、一人は攝津多々良氏にして本國紀伊の刀匠、これは業物。延寶貞享頃、上銘の是一同じく石堂派初代は明應頃、その後幾代もあつて石堂、京、大阪、江戸、紀州に住した。共に新刀の作者、刀の風は共通の點があるから何の長幸か分らない、是一は四代



か五代、即ち末の是で一であらう初代は業物。次は一竿子忠綱、これは六つかしい刀で初代一竿子なれば名刀であるが、此御刀は三代初名宗綱、近江守忠綱で江戸の刀匠、位は劣る、それに二世忠綱は一竿子忠綱と切つたけれど、三代は御刀のやうに粟田口一竿子忠綱と切らず、多くは粟田口近江守忠綱と切つた。次の河内守國助は大阪の刀匠初代初代は慶長頃、後三代あり共に新刀の作者、御刀は何代目か分らねば位のつげやうがない。次の忠吉は肥前同銘八人あり、肥前國忠吉と切つたのは見たれど肥前住忠吉と切つたのは何れも未だ見ず、斯様に調べ上げて見れば失禮乍ら何の御刀も餘り高價のはいやうである。

左の刀お説を乞ふ

茨城 富山 昇

義明、泰之、備前長船祐忠(延寶五年二月日)豊後住藤原輝行、南都住金房政定、源克邦、大和義忠、來國俊に無銘のものありや

▲義明には種々な説がある、先づ第一には相模山内の刀匠で、本國は越

前福岡、建武年間の人であるといふのと、福岡一文字の一派で後に山内に行つて修業したといふのと、或は義行の子にして曆應の人であるといふのと、或は弘安七年に生れ、曆應四年に歿したといふのと、或は山内國綱の一名であるといふのと、或は義秋とも作るといふのと種々にある。兎に角此の人は一人鍛冶である。泰之は若狭小濱本郷の刀匠で、大永頃の人、これも一人鍛冶。備前長船祐忠は七太夫と稱す、延寶年間の人、これも一人鍛冶。輝行は又一人鍛冶、石見守と稱し、延寶年間の人、政定は大和奈良の刀匠にして金房左衛門尉と稱す、大永、天文年間の人、克邦は調べ届かず、源邦売にては無きや、義忠は大和手搔の刀匠にして文珠義忠といふ、この作者の銘には時に左文字に造つたのもある、元祿年間の人。來國俊の銘の有無、無しとは斷じて云へまい。

(一)表銃宗長、裏銘正和三年八月吉日、表裏に梵字あり、(二)字多勝國以上の二刀御説明を願ひます(武藏比企郡古矢能生)

▲宗長は同銘二十人、その中正和頃の作者といふは備前長船の鍛冶、初代長光の門人宗長がその頃に當るやうに思ふ、宗長は文保頃としてあるが、文保より正和迄は僅かに五年しか隔たつてゐぬ。この方にはその年代に當るものがない、作者が定まらぬから列位は申上げぬ。次の勝國は越中宇多派の刀匠、延暦年間の人、位列分らず。

私方に古より傳來したる脇差無銘摺上物にして、關の金重の兼氏の二人の中ならんと申傳ふるものあり、明治初年某氏に見せたるに、此は關の兼友ならんと云はれたり。兩人は正宗門人なりと聞けり、兼友は二人の刀匠に比し、甲乙は如何。又二人の刀匠に似寄りたる所あるものによ、次に備前宗光なりと云ひ傳ふる刀あり、之れも摺上物にして無銘なり、此の年代作柄御示しあれ(牛込原町木幡直清)

▲美濃關の住兼氏は本國大和元應年間相州正宗の門人所謂志津といふ上々作の鍛冶、金重も關住同年代法名を道阿といふ中の上作の刀工、兼友は志津兼氏の子兼友同人で貞和頃の人である。列位は中の上美

濃直江の兼信など、列すべき人である。備兼氏の刀鍛板目にして極もありよく沸え流流しもあり、亂れ刃は丸き心ありて亂入玉などもあり、銚子丸く大出來なるは左文字に似て偶には直刃もある、刀造り庵三棟切先いろ／＼忠むね肉鑑横、槍垣もある。金重の刀之れと同じく焼刃は灣刃小五の目などに亂る、沸があり志津の小出來なるやうなものもある。兼友また父に似て只其品が落るはかりである。次に備前の宗光は元應より天文に至る間六代あり、順慶長光の門人、太刀の風姿長光に似て纏理のもの多し、列位また惡からず、刀の筋丈夫なれば充分保存する値がある。

奥州黒川正長新刀か古刀か御見分け下され度候(青森縣秋涼生)

▲これは新刀の作者、慶長時代の名工たる京の埋忠明壽の門人であるが、父は伊豫松山の刀工長國といふものであるから、寛永の四年明壽の門を卒業した上、父に随つて會津に行き、同二十年に藤四郎政長と改め、

慶安元年の春に歿したといふ、お問合せの近江守忠綱とは少し隔たてがあるやうである。

小生方に一本の鎗あり銘は加賀守藤原の貞廣とあり御鑑定煩度候(八王子愛蔵生)

▲加賀守貞廣は越前下坂派の刀匠であつて、また京大阪にも住した人である。本國は越前高柳氏藤原を姓とす、寛文享保年間の作者で新刀中上の下作に列する、刀は匂深く花やかに出来たものがある。

備州長船祐定長さ二尺四寸五分、天文十六年二月日とあるもの、價值御判断下され度候(茨城菊田重助)

▲天文年間の祐定を擧げてお答しやう

△横山源兵衛祐定(祐定二世)△五郎左衛門尉祐定△次郎九郎祐定△二郎四郎祐定△八郎次郎祐定△平六祐定

左の二刀御説明下され度候

茨城 幸 甫 納

一、備前國長船住鎌元、延文三年八月日長二尺五寸丁子刃にて、蟬肌あり、地色白く切先延びてふん張あり

二、備前包平作長さ二尺二寸、小亂にて丁字交り小切先太刀姿細し奎肌にて地色白し

▲包平から説明する包平は永延年間の人、所謂古備前の名工である。

包平の刀の姿は幅狭く重ねも厚からず、鎗高く、鍛板目にて色青し、また刃色白く匂深き方であるが、同じ古備前の高平、友成の作よりは鈍も華やかに勝れて、多くは龜文に丁子足か交つてゐる、また刃渡りには二筋樋を掛け忠は雉股形が多い。お刀の模様にて案するに小切先で姿の細やかな、地色の青いなど頗る眞正らしく思はれる。次の兼元は知らず恐らく正宗弟子兼光の子即ち二代兼光の見誤りではないか、それならば延文三年の年代にも合ふ。

小生鑑識なければ太刀一振求め候處之れは青江の貞次と承り山間の片田會新の如き高銘の刀有之、答はなし、定めて追掛銘かと、存候へ共一

應御判断を仰ぎ申候其刀は長さ二尺九寸三分直刀にて小足入備中骨  
江住貞次と有之候(越後國北魚沼郡猪川茂三郎)

▲片田舎に高銘刀が無いとは餘りに謙遜過ぎる、其のお刀或に真正か  
も知れぬ。然し追掛銘たるや否やの判断は紙上では出来ない。それ  
は是非一見したいものである。備備中物の刀は多く鎔高く、鐵板目細  
かに、地金青く、渦卷の膚有て剛く、龜文縷理送足何れも鋭細く匂ひ深し  
とあるが、作には甲乙があるのだから、貞次を以て此の條項に當穿める  
ことは出来ないが、而もその心して貞次の刀を見ればその大凡が分る  
であらう、青江にあつては宗次直次、康次、貞次と何れも勝れた上手であ  
る。次に名物となつて貞次の押形を見ると銘には備中國住貞次造と  
切つたもあり、貞次と二字切つたもあり、備中住大隅權介平貞次と切つ  
たもあり、衛門太郎と切つたもある、また刀の象からいへば初めは小肉  
峯であつたが喜曆、元徳、正慶後の峯は、小肉から角棟になつた、鋒と及紋

とは一々説明が出来ないけれど、鋒は小丸帽子で及紋は先ほど廣及に  
小亂及と思へば宜しい、お問答せの刀の御説明が簡略で判定の致しや  
うが無いから此方からは只参考になることだけを申上げた次第であ  
る。(舌刀)

小生所持相模國綱廣と切りし刀あり之れは何代目位に候や研師の話  
にては一番末の綱廣ならんといふ御高察如何(淺草寺島生)

▲相州の綱廣は小田原鍛冶同名九代外に一人あり何れも相州住綱廣  
と切り末の綱廣(天明文化)は山村直三郎相模國住綱廣と切り、只相模國  
と切つたのは未だ見たことがない故に何代目といふ判断は致しやう  
もない。

祖先傳來の刀二尺、直刃にて銘は粟田口國綱とあり一見新刀の如く重  
量あり年代及製作地、經歷等詳細御説明下され度候(山梨谷村矢崎岩吉)

▲粟田口國綱は古刀に二人、新刀に一人あり、一人の國綱は山城國粟田

口の住にして吉光の門人、永仁、文保年間の人なりと雖も亦吉正の弟なりとも、又姓は藤原氏にして初名は眞國、相模山内に移り、後ち國綱と改めたる正安、徳治年間の人なりとも本朝鍛冶考、古今鍛冶考には書いてあるがそれは有名な鬼丸の作者ではなく、別の國綱で、鎌倉の北條泰時が鍛へさせた鬼丸の作者の國綱は後鳥羽天皇の御番鍛冶で、天皇が隠岐の國へ流された時にも、従つてお供をしたこともある有名な刀匠。その作の鬼丸は今日帝室の御物となつてゐる位であるから、誰も知らぬものはあるまい。借此の國綱は粟田口國家の第六子、隱岐の御番鍛冶を奉じて左近將監となり、元文年間鎌倉に下つて山内に住居し、弘長の頃まで生存した大業物の作者、一名を善明とも、又神氣とも稱したといふことである。最う一人の國綱は初代忠綱の門人で、寛文頃の人、お刀拜見の上ならでは判別し難いが、新刀の如く重みがあるとある處から考へると、古刀の國綱ではなく、全く寛文の國綱らしい。寛文といへば徳

川四代將軍家綱の時に當り、今より凡そ百五十年許り前である。さて然うすると甚だ失禮だが、餘り珍重するお刀でもないらしい。

高嶽羽舉先生の刀劍談補遺に、奥州會津下坂は分らないとあり、迂生覺ゆるに會津の下坂は累代十文字鎗の家柄にて、系圖の寫し御覽に入るべし。

初代爲康、奥州會津下坂と打つ豫州松山住眞柄十郎左衛門末子と云ふ年號、寛永、二代爲勝、同じく寛永、三代爲利、年代明曆、四代爲次、年代元祿、五代爲長利、年代享保、六代爲精、年代寛延、七代爲隆、年代明和、八代爲直、(初爲信)年、代文化(岩代若松市日下千秋)

▲お説眞にその通り、爲康は會津の刀匠にして下坂氏、越前淺倉義景の臣、眞柄十郎衛門直元の末子である。直隆は膂力絶倫、常に一丈二尺の大刀を振つて戰場に臨むに、如何なる強敵と雖も面を向くべくもあらず。皆その下に一命を落したが、直元、姉川の合戦に出で敵と渡り合ひ、味方敗走したる中に踏み留まり、一人血戦するほどに身に重傷を被り、勢ひ

勞れて遂に徳川氏青木一重の爲めに槍を以て突き殺されたのである。直元の第十郎三郎直澄又大力の士、亡兄の大刀を戦場に得て敵と斬り結び、軍陣必らず其の武功を現はした。爲康は戦死の時尙幼なるを以て、近江西坂本の刀匠下坂八郎左衛門康綱の家に養はれ、鍛冶の業を學び、後伊豫松山に移り、領主加藤嘉明の刀匠となり、下坂甚兵衛爲康と稱した。寶永四年嘉明封を會津に遷すに及び、爲康又従つて會津に赴き、代々會津の住となつたのである。

左の押形(原圖略)の作者年代等お知らせ下され度候(麻布坂下町富士の家)

▲押形の氏信岩捲は美濃の刀匠で、大永、天正、寛文、元祿と四人ある岩捲は地名であるが天正年間の氏信は清水に住して岩捲氏信と稱したといふ又寛文の氏信は只岩捲氏信と稱したが元祿の氏信は石切氏信と稱し尾張にも住したといふ御所持の刀は寛文の氏信ではないかと思ふ。

小生所持の刀に備前長船住忠元裏に明應二年入月日と有之右は保存すべき物に候や伺上候(信州伊那生)

▲忠元は忠光にては無きや明應の忠光ならば七世九郎左衛門尉忠光であらう忠光とすれば業物であるから御保存なさるが好からう、但し如何に名刀なりとも地荒れ匂切などあり刀かスガレてゐたのでは唯名刀といふだけ賞美する價は無い今日刀を賞美するはその銚匂ひを見るものであるから是非満足であつて欲しいものである。

和泉守藤原兼定と銘ある一刀御座候兼定の銘は昔斯の如く切るものに候や伺上候(芝浦孤劍生)

▲和泉守兼定は三代ありその外の兼定は數人あり和泉守は初代兼定は濃關住と切り二代は濃州兼定作和泉守藤原兼定と切り三代は濃州關住兼定造と切るお刀は二代の作と存す。

續刀劍全書終

明治四十五年三月五日印刷  
明治四十五年四月拾日發行

續刀劍全書附

定價五拾錢

送料六錢



不許複製

著者 清水孝教

發行者 日高藤兵衛

印刷者 武井万二

印刷所 日本印刷株式會社

東京市本郷區金助町卅三番地  
東京市神田區三崎町三丁目一番地  
東京市神田區三崎町三丁目一番地

發行所

東京市本郷區  
金助町卅三番地

日高有倫堂

電話下谷四五九三番  
振替東京一八八三四番

# 大 賣 捌

東京市神田區長神保町  
 東京市京橋區中橋廣小路  
 東京市日本橋區本石町三  
 東京市神田區裏神保町  
 橫濱伊勢崎町佐木町  
 大阪市心齋橋南久太郎町  
 名古屋市玉屋町  
 名古屋市本町  
 名古屋市本町  
 遠州濱松町  
 京都市佛光寺通烏丸  
 京都二條川原町  
 和歌山  
 神戶市本町  
 岡山市  
 廣島鹽屋町  
 廣島市東橋町  
 山口大市町  
 筑後國久留米市

東京 川堂  
 前誠堂  
 至誠堂  
 上田隣  
 第四隣  
 福音隣  
 星野文星  
 川瀨代  
 小澤百架  
 谷島  
 東枝書  
 寶文書  
 宮井書  
 川瀨日進  
 山陽書籍會社  
 積善館  
 友田藤助  
 白銀支店  
 菊竹

熊本市新町  
 熊本市上通町  
 筑前博多桃屋町  
 信州上諏訪町  
 信州長野市  
 越後國長岡  
 越後國水原  
 越後國新潟古町  
 同  
 高岡市守山町  
 金澤市片町  
 前橋市曲輪町  
 宇都宮市鐵砲町  
 仙臺市大市  
 弘前市土手町  
 北海道札幌南一條  
 北海道函館地蔵町  
 濱國大連市大通通一丁目  
 京城

長崎書店  
 金田書堂  
 高田書堂  
 宮阪日進堂  
 西澤書堂  
 西張書堂  
 西村六平店  
 北村支店  
 北海光社  
 學海堂  
 宇都宮書堂  
 煥平書堂  
 內田正榮堂  
 藤崎書店  
 今泉書店  
 富貴堂  
 小島大盛堂  
 松井松之助  
 日韓書房

四十五年三月印刷  
 每月訂正增補改刷

## 有倫堂出版書目

東京市本郷區金助町三拾三番地

日 高 有 倫 堂

電話下谷四五九三番  
 振替口座東京一八八三四番



赤司繁太郎著  
男女兩性の愛

定價拾陸錢  
送料六錢

愛、兩性の愛なる言葉既に視て讀者の心をそそるものあるべし、この書は著者が大胆にして自由なる見地よりして婦人問題、殊に婦人の中心點を論じたる告白文なり、愛を味ふべき青年男女の當事者は言を待たず、世の父兄たる人々も來つて視よ、この書の教ふる所如何に多大なるものあるか悟るべし、

野田豊實著  
希臘勇士物語

定價四拾錢  
送料六錢

古代希臘の勇士は武人の花なり、萬里の波濤を踏んで遠征し、險山絶路を犯して草賊を滅ぼし民をして其堵に安んぜしむ、百難千困の間、いかに彼等の武者振りの勇ましく、其智謀の深遠なりしか、更に亦、勇術健闘のうち如何に優しく雅びたる一道の人情美か發揮し彈琴奏曲、疲れたる軍氣を鼓舞し、或は嬋媚花の如き美人の内助により耐苦忍勞よく凱旋將士の榮を擔ふに至りしかは本書に之を語る、青年學生が家庭の讀本として本書の如く清健にして有益なるばなし、廣く一般家庭の愛讀を請ふ、

高橋五郎譯

カーライル論説集

定價一圓廿錢  
送料八錢

カーライルはチエレンツ聖人と呼ばれ健全なる新思想鼓吹者として夙に喧傳せらるる其晩年女皇グロトリアより華族に列せしめんとその内意あるや臣を以て無上の光榮とすありとす高橋五郎氏カーライルの論説を輯めて餘りと爲し「カーライル論説集」と曰ふ此大聖人の深遠雄大な思想文章茲に初めて一般の讀者に愛讀味せらるるに至らんとす

清水橋村註解

家康教訓録

定價四十五錢  
送料六錢

徳川家康は偉人也、偉人の教訓は片言隻語と雖も教訓となるる古來家康の傳記を著したるは多し、家康の語録を編したるは未だし、著者茲に觀る所あり、家康の語録を引き之れに註解を加へ、後人の模範たるべきものを示す、一語は一語より貴し、學生諸君の必讀文字也、

清水橋村編

續刀劍全書

定價六十五錢  
送料八錢

著者處に刀劍全書を出版するや愛刀家の需要市に満ち再版三版又盡きんとするの盛況を呈せり刀劍全書は世とて所前古刀の沿革を説く續刀劍全書は慶長以後の新刀を説き其作者列位刀の良否並に傳系鑑定の標目等凡て刀劍家の知悉せざるべからざるを網羅す

江見水蔭新著

小火中の女

定價七十錢  
送料八錢

火の如く情の熱せる少女が、最も奇しき運命に弄はれて、知らず識らずの間に社會の裏面を駆け得たる人生の秘密史なり、一讀三嘆の妙あり、蓋し文學的價値を有せる興味中心の小説として此書の如きは稀なるべし

山田方谷筆口授

孟子養氣章解説

定價二十錢  
送料四錢

山田方谷翁は舊松山藩の儒者にして大に藩政を改革し其功績顯著なりしかば當時木戸孝允河井繼之助等に敬慕せられしは世人の熟知する所なるが、此書即ち方谷翁が王陽明の學に本づきて孟子の養氣章を解説し且つ翁の抱負を吐露せられたるものにて經世に志あるの士は座右に欠くべからざる珍書なり、

故國木田獨歩著

獨歩遺文

定價五拾錢  
送料八錢

獨歩は明治時代が産出せし最も高調の文豪なり、殺後彼の作品は己に多量に世に公にせられたり、されど其の多くは彼が世に示さむが爲に執りたる筆跡なり、獨歩遺文に收むる所の大部は獨歩が世を對象とせず自己の前に自己を披瀝したるもの、是れ未だ公にせられざりし所以なり、感懐、主張、描寫、讀文、批評、日記、獨歩の概はれざる遺稿は此の各篇に月の如く輝けり、

文士 矢賀矢一先生序 清水橋村編 一上製四六形 約八百頁 定價壹圓廿錢 送料 十二錢

家庭 實録 今日の歴史 全一冊 定價壹圓廿錢 送料 十二錢

清水橋村氏一たび「今日の歴史」を東京朝日新聞に連載するや、洛陽の紙價爲めに高まる本書は、當て出版せる一家庭訓話今日の歴史三巻の花三巻の不辨なるを避け全一巻にして、讀者の要求に應ぜんとする者氏が本書に對するの技術は世人世く之れを知れり知らざるものは本書が一年三百六十五日に亘りて興味あり實益ありて青年子弟のみならず學校教師父兄などの参考に宜しきを知るべし蓋し近來の快者なり

清水橋村編 定價六十五錢 送料 八錢

三版 刀劍全書 定價六十五錢 送料 八錢

東京日新新聞紙上に此の刀劍談出づるや、讀者の歡迎湧くが如く愛刀の趣味俄然として勃興し爲めに讀者より新聞社に於て向ける種々の注文質難をなされり編者は我新聞社に於て唯一の刀劍通を以て目せらるる人、これが必要に應ぜんとす本書を編まれたり本書は本朝鍛冶の系統を正し刀劍鑑定秘訣を説きたるものの特長とせる所は幾多の刀劍古書に於てなき組織的解説にあり凡そ刀劍を藏するもの本書一部を讀てなば以てその有眼者たるに近きからん乎

大元帥閣下 比島中將閣下 千葉如山著 中將閣下 同 定價三十錢 郵稅 六錢

最新 武道教訓 全一冊 定價三十錢 郵稅 六錢

現代の劍客千葉長作氏に武道教範を著して大いに江湖の高聲を傳し今又本書を著して武道の根本を究め武士道を時代の精神に昇華し終りに劍法の秘訣武道觀念を示して成敗死生の岐かる妙機を詳説し盡したり文章亦平易にして何人も讀んで之れを了解し得るの便益あり遊學激甚なる活

世界にあつては特に座落に缺くべからざる近來の好文字なり試みに一讀を附す

照山 佐々木安五郎著 定價二圓 送料 十二錢

照山觀古王牛生の心血の結晶たる世界的大著述は世に顯れたり此書世に出て初めて明かに東西文明の基點を指すべし人類史を改造すべく之に依つて人類學官能學等に新紀元を開くべき有力なる空前の珍書也明治時代未曾有の有益多趣味なる書籍也讀者乞ふ輕々に看破する勿れ

海舟 先生 水川清話 定價六十五錢 送料 八錢

千古の達人一代の先覺者なる海舟先生が晩年水川の森蔭より冷眼世間を睥睨しつ、座談の間天機を漏れ來りたるものを精撰して本書を成し清話高談一々奇抜にして穩健なことを徹底十二分に人をして之を聞かざる所ありしむるものにあらざるは無し是れ一種の經典一種の哲學書にして而も側面より見たる興味ある史傳也

村田勝太郎著 (滑稽文學) 定價五十錢 送料 八錢

小 千眼千里眼娘 定價五十錢 送料 八錢

千里眼流行の尻馬に乗つて出でたる駄作にあらず、寧ろ千里眼流行の滑稽なる世相を諷刺するの目的を以て現れたる深刻なる作物也、主人公千里眼娘の性格行爲當世女學生の眞相を活躍せしめ其滑稽にして且つ感懐なる經過は、讀者をして笑ひ且つ泣かしむるに足れり

高橋五郎著 最新 靈魂實在論 定價八十五錢 送料 八錢

再版 ルナン耶蘇傳 定價壹圓五錢 郵稅 八錢

再版 基督教本義 定價五拾五錢 郵稅 八錢

海老名正先生著 宗教教育觀 定價五拾五錢 郵稅 八錢

海老名正先生著 人道 定價拾錢 郵稅 二錢

日高有倫堂編 基督教講壇集 定價七十錢 郵稅 八錢

匿名隱士著 破天人論 定價拾錢 郵稅 四錢

文學士 桑木仙醉著 (四六列總クローズ) 性格と哲學 定價壹圓廿錢 郵稅 六錢

大町桂月 津著 心靈の研究 定價四十錢 郵稅 六錢

横山筆助著 成功したる應用自在 定價拾五錢 郵稅 六錢

山口先生序 シルレル原著 齊木仙醉譯 接神術 定價貳拾貳錢 郵稅 四錢

齊木仙醉對佛國神學教授ボア博士 三位一體論 定價貳拾錢 郵稅 四錢

綱島梁川著 (菊版總クローニス頁數約千頁)

版五 梁川文集 定價三圓三五錢 郵稅拾貳錢

中江兆尺著 (菊版總クローニス製函入)

兆民文集 定價壹圓卅錢 送料拾貳錢

田岡敬雲著

版再 明治叛臣傳 定價五拾五錢 郵稅八錢

大町桂月 白河鯉洋共編 菊版函入約六百頁 笹川臨風 樋口龍峽共編 當代の名畫數葉挿入

版再 むら雲 定價壹圓卅錢 送料拾二錢

大町桂月 樋口龍峽共編 函入上製

千波萬波 定價壹圓卅錢 送料拾貳錢

安部磯雄著 (菊版上製四百八十頁)

應用市政論 定價壹圓卅錢 送料拾貳錢

大町桂月序 有倫堂編

版三 明治大家文集 定價八拾錢 郵稅金八錢

伊藤銀月著 小杉未醒齋(挿繪十枚)

版再 新譯水滸傳 定價八拾五錢 送料金八錢

景山英著

版五 妾の半生涯 定價三拾五錢 郵稅六錢

文學士 久保天隨著

版再 山水寫生 定價四拾五錢 郵稅金六錢

文學士 久保天隨著

版再 夕紅葉 定價三十五錢 郵稅金六錢

文學士 久保天隨著

文壇獅子吼 定價四拾五錢 郵稅金六錢

伊藤銀月著

月下之人 定價卅五錢 送料六錢

文學博士姉崎先生序 加藤孝教編

版再 女性觀 定價三十五錢 送料六錢

伊藤銀月著

三國志物語 定價八十五錢 送料八錢

文學博士夏目先生校閱 上田先生序文 文學士 小松武治譯 大町桂月先生

版二十 沙翁物語集 定價七拾錢 郵稅八錢

大町桂月著

版六十 わが筆 定價四拾五錢 郵稅六錢

大町桂月著

版一十 我が文章 定價四拾八錢 郵稅六錢

大町桂月著

版四 代表日本人 定價八拾錢 郵稅八錢

大町桂月著

版再 月影集 定價六拾錢 送料八錢

大町桂月著

版七 家庭と學生 定價參拾八錢 郵稅六錢

大町桂月 中内蝶二合著

少女と山水 定價卅五錢 送料六錢

大町桂月先生撰

版一十 第一時代青年文集 定價四拾錢 郵稅六錢

大町桂月先生撰

版一十 第二時代青年文集 定價四拾錢 郵稅六錢

大町桂月先生序 角金潮聲著  
版六 宇宙と人生  
定價貳拾五錢  
郵稅四錢

凡鳥山人著  
版五 馬鹿物語  
定價四拾錢  
郵稅金六錢

姉崎博士序 萬朝報記者茅原華山著  
版五册 向上の一路  
定價三拾錢  
郵稅金六錢

茅原華山編纂  
我こそ人  
定價貳拾錢  
郵稅金六錢

萬朝報記者 茅原華山編纂  
版再 青年の詩吟  
定價貳拾五錢  
郵稅四錢

伊藤銀月著  
版再 偉人達人  
定價三十五錢  
郵稅六錢

大町桂月 樋口龍峽共編  
寄る波  
定價五拾五錢  
郵稅金八錢

小川半鐘著  
草汁漫畫  
定價六拾錢  
送料金八錢

執筆一 小杉未醒 稻本邦助 坂井紅兒  
畫伯 小川半鐘 太田三郎 當舍蛇男 岡本月村  
版再 漫畫百趣  
定價五拾錢  
送料八錢

執筆一 岡本月村 小川半鐘 橋本邦助 編鹿島  
畫家 小杉未醒 齋藤五百枝 山田實 櫻巻  
漫畫春秋  
定價六十錢  
送料八錢

小杉天外序 飯澤天羊著  
罵倒漫畫  
定價六十錢  
送料八錢

戶張孤雁著  
孤雁挿畫集  
定價五拾錢  
郵稅八錢

田口柳汀氏著  
版再 長編小説家の柱  
定價八十錢  
送料八錢

田口柳汀氏著  
版四十 小説伯爵夫人  
前編 定價八十錢  
送料八錢

田口柳汀氏著  
版二十 小説伯爵夫人  
後編 定價八拾錢  
送料八錢

田口柳汀氏著  
版四 小説終編伯爵夫人  
定價九十五錢  
送料八錢

田口柳汀氏著  
版五十 女夫波  
定價壹圓廿錢  
送料拾貳錢

田口柳汀氏著  
版再 熱血  
定價三十錢  
郵稅六錢

田口柳汀氏著 (清方齋挿畫三枚)  
版再 小説追恨  
定價金壹圓  
郵稅八錢

小栗風葉著  
版再 小説意氣地  
定價八十五錢  
送料八錢

小栗風葉著 小川默水合著  
小説女  
定價七拾錢  
送料八錢

小栗風葉著  
版四 小説十七八  
定價七拾五錢  
郵稅八錢

小栗風葉著  
小説新粧  
定價四拾五錢  
郵稅六錢

江見水陸著  
版再 小説空中の人  
定價九十錢  
送料八錢

田口掬汀著

説小 二葉草

定價八拾錢  
郵稅八錢

田口掬汀著 大橋綱入美本

説小 猛火

定價一圓廿錢  
送料八錢

田口掬汀氏著

説小 獨木舟

定價金四拾錢  
郵稅六錢

田口掬汀著

説小 怪光

定價八十五錢  
送料八錢

田口掬汀著

説小 怪光

定價八十五錢  
送料八錢

田口掬汀著

新 喜劇

定價四十五錢  
送料六錢

江見水蔭著

説小 女馬賊

定價九拾錢  
郵稅八錢

川上眉山著

説小 觀音岩

前後各八十錢  
送料八錢  
合本一圓卅錢  
送料十錢

伊藤銀月著

説小 怒濤

定價八十五錢  
郵稅八錢

伊藤銀月著

説小 出潮

定價六拾錢  
郵稅八錢

齊藤無絃著

説小 天國

定價六十五錢  
送料八錢

眞山青果著 (上製)

説小 四十二年

定價七拾錢  
送料八錢

半井桃水著

説小 子寶

定價六拾錢  
送料八錢

半井桃水著

説小 萩の下の露

定價六拾五錢  
送料八錢

半井桃水著 清方衛

説小 慰問袋

定價七拾五錢  
郵稅八錢

半井桃水著

説小 濡衣

定價六拾錢  
送料八錢

嬰庭篁村著

説小 不問語

定價七拾五錢  
郵稅八錢

嬰庭篁村著

説小 竹影集

定價六拾五錢  
郵稅八錢

德田秋聲著

説小 花たば

定價四拾五錢  
郵稅六錢

德田秋聲著

説小 母の血

定價七拾錢  
郵稅八錢

故國木田獨歩氏合著  
同夫人治子女史

説小 黄金の林

定價八拾五錢  
送料八錢

泉鏡花著

説小 誓之卷

定價七拾五錢  
郵稅八錢

泉鏡花著

説小 無憂樹

定價八拾五錢  
郵稅八錢

泉鏡花著

説小 ななもこ櫻

定價四拾錢  
郵稅六錢

村岡莊吉著 山田實書

### 江戸水滸傳

定價五十錢  
送料八錢

小川燧村編

### 勤王藝者

定價五十錢  
送料八錢

福田琴月著 飯澤天羊口繪意匠

### 關ヶ原

定價八十錢  
送料拾貳錢

小松小兒科院長 小松貞介先生著

### 小兒保育法

定價四拾五錢  
郵稅八錢

鹿島櫻菴編

### 景情小品

定價參拾五錢  
送料六錢

大町桂月序 小栗風葉跋 王春嶺著

### 現代文士二十八人

定價四拾錢  
郵稅六錢

岩野泡鳴著

### 新自然主義

定價五拾五錢  
郵稅六錢

社會學專攻文學士樋口龍峽著

### 社會主義と國家

定價拾五錢  
郵稅貳錢

樋口龍峽著

### 社會論叢

定價五拾五錢  
郵稅金六錢

大町桂月 伊藤銀月編修 天賴著

### 文士寶典

定價五拾錢  
郵稅金六錢

巽庭篁村著

### 天下泰平

定價四拾錢  
郵稅金六錢

ナヨサイア、スフロンク原著、石川三四郎譯

### 二十世紀の大覺醒

定價三拾錢  
郵稅金四錢

## 机上圖書館

全部 函入  
金貳圓八拾錢  
送料拾六錢

本書を開かば坐ながら圖書館に入ると同一の結果を得ん

### 第一 曆史要領

定價三拾五錢  
郵稅六錢

### 第二 地理主點

定價參拾五錢  
郵稅六錢

### 第三 科學新潮

定價參拾五錢  
郵稅六錢

### 第四 法制綱要

定價參拾五錢  
郵稅六錢

### 第五 新家庭觀

定價參拾五錢  
郵稅六錢

### 第六 文學概說

定價參拾五錢  
郵稅六錢

### 第七 成功指針

定價參拾五錢  
送料六錢

### 第八 人物の新髓

定價參拾五錢  
送料六錢

## 伊藤銀月編

高橋五郎著

### 英語實驗百話

定價參拾錢  
郵稅金一錢

田岡嶺雲著

### 霹靂鞭

定價四拾五錢  
郵稅金六錢

戶川秋骨著

### 時代私觀

定價四拾五錢  
郵稅金六錢

本居豐穎撰

### 紫文摘英

定價三拾五錢  
郵稅金四錢

醫學士 佐藤得齋著

### 美的衛生

定價四拾錢  
郵稅金六錢

醫學士 佐々木多聞著

### 新化粧

定價四拾錢  
郵稅金六錢

英國  
日本  
居  
松葉  
アラスカ

### 市營と私營

理學士(教學專攻)河野健助著

定價四拾五錢  
郵稅六錢

### 初等代數學講義

卷上

鈴木秋子女史著

定價各壹圓  
郵稅八錢

### 軍國の婦人

苦學社編輯

定價二拾八錢  
郵稅四錢

### 苦學の伴侶

撫子著

定價三拾錢  
郵稅四錢

### 風流戰

伊藤銀月著

定價四拾五錢  
送料六錢

### 社會研究 高原生活

定價四拾錢  
郵稅金六錢

小山六之助著

### 活地獄

定價參拾八錢  
送料六錢

杉山先生書簡 黒澤長三郎編

### 名家手簡

定價參拾錢  
郵稅六錢

天野誠齋編

### 名流實話 身體健康法

定價二拾五錢  
郵稅六錢

佐々木 麗雪序 稲田海光編

### 家庭文藝 名論卓說

定價四拾五錢  
郵稅八錢

### 安全なる結婚

定價拾八錢  
郵稅四錢

齊木仙醉先生譯

### トルストイ教訓小説集

定價參拾錢  
郵稅四錢

加藤直士譯

### トルストイの 日露戰爭觀

定價參拾錢  
郵稅四錢

高橋五郎著

### 杜柏品藻

定價參拾五錢  
郵稅六錢

廣風秋元喜久雄譯

### 四版 獨逸詩集 紅粉集

定價三拾五錢  
郵稅四錢

文學士 小原無絃譯

### 原文對照 パーンスの詩

定價三拾錢  
郵稅四錢

薄田泣菫君題辭 小島島水君序文  
浦原有明君序詩 清水橋村君著

### 新體詩集 筑波紫

定價四拾錢  
郵稅六錢

文學士 小原無絃譯

### 原文對照 シエレーの詩

定價參拾五錢  
郵稅四錢

泡鳴著

### 新體詩集 悲戀悲歌

定價三拾五錢  
郵稅四錢

岩野泡鳴著

### 闇の盃盤

定價三拾八錢  
郵稅六錢

泡鳴著

### 新體詩集 夕潮

定價三拾五錢  
郵稅六錢

細越夏村著

### 新體詩集 靈笛

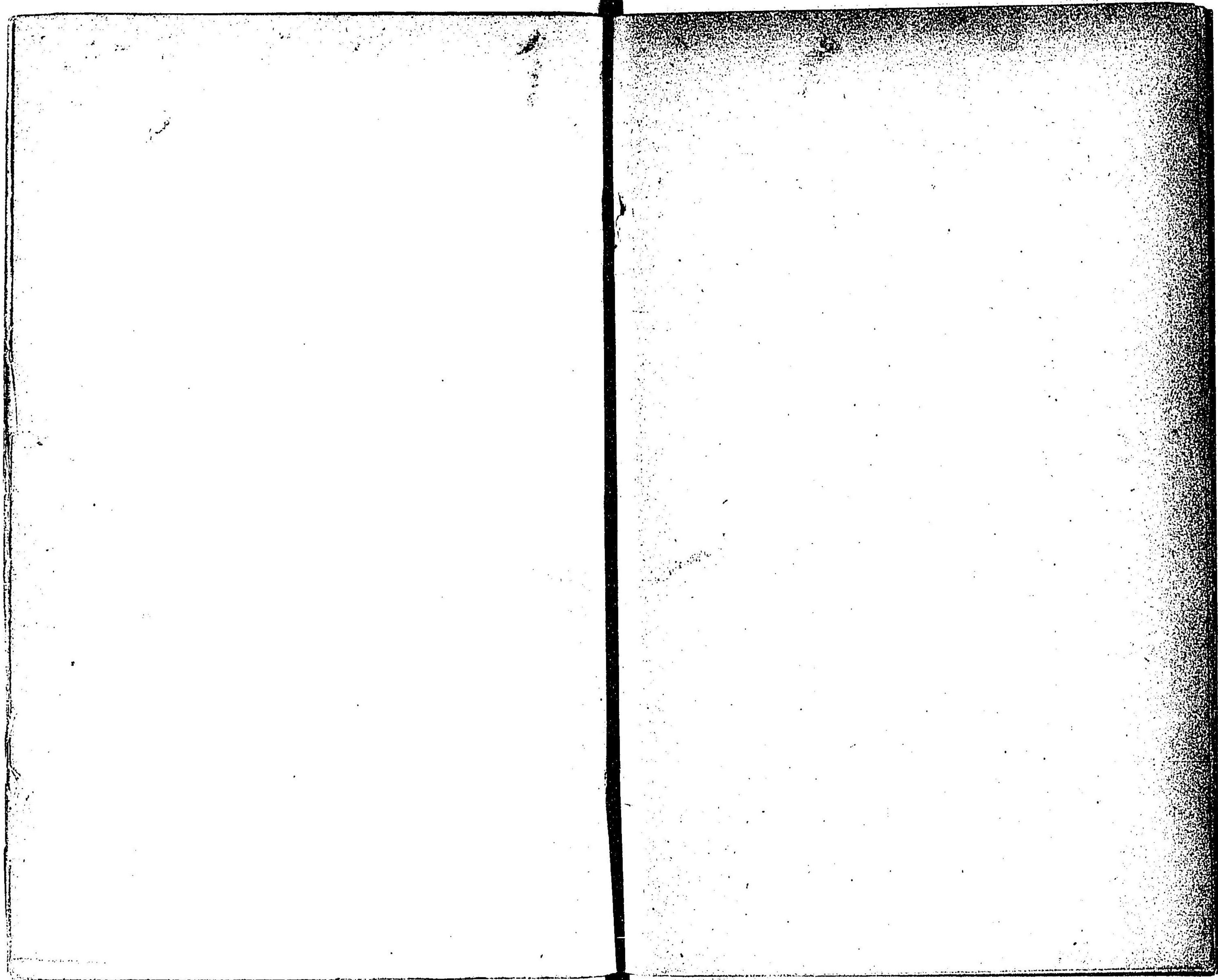
定價三拾錢  
郵稅四錢

秋元蘆風譯

### 新體詩集 野葡萄

定價三拾錢  
郵稅六錢

○原文對照○卷末に評註を附す

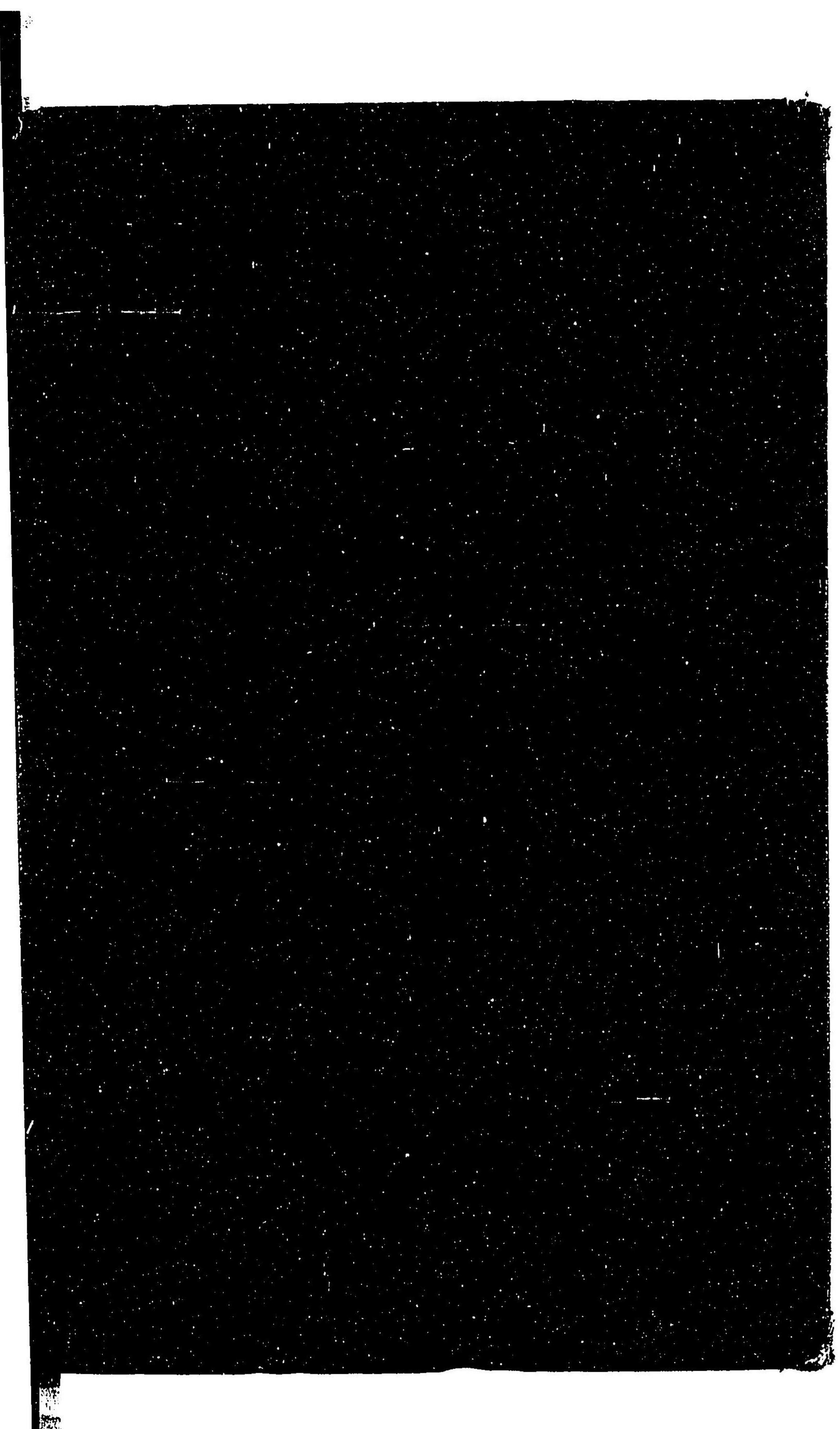




382  
90



1334  
90



332  
90

